

島原市文化財調査報告書 第19集

長貫 A 遺跡

水利施設等保全高度化事業 特別型(畠地帯担い手育成型)三会原第4地区に伴う埋蔵文化財発掘調査

2019

長崎県島原市教育委員会

島原市文化財調査報告書 第19集

長貫 A 遺跡

水利施設等保全高度化事業 特別型(畠地帯扫一手育成型)三会原第4地区に伴う埋蔵文化財発掘調査

2019

長崎県島原市教育委員会

発刊にあたって

本書は三会原第4地区における農地整備事業に伴って実施した長貫A遺跡の発掘調査報告書です。

長貫A遺跡は昭和60年に古田正隆氏らを中心として緊急調査がおこなわれ、縄文時代早期から晩期までの土器が出土しております。

このたびは、水利施設等保全高度化事業 特別型(畑地帯担い手育成型)三会原第4地区において用排水路を整備する計画地となった箇所について、長崎県島原振興局との間で埋蔵文化財の発掘調査に係る協議をおこない、発掘調査を実施いたしました。

今回の調査では、縄文時代早期の押型文土器の底部に組織痕を残すものも複数確認され、狩猟に用いたと考えられる落とし穴状遺構も確認されました。

最後になりましたが、今回の調査にあたり、酷暑と大雨の中、現場作業に従事された作業員と整理作業に従事された作業員の皆様に心より感謝申し上げ発刊のことばといたします。

令和2年3月

島原市教育委員会
教育長 森本 和孝

例　言

1 本報告書は平成31年度（令和元年度）の水利施設等保全高度化事業 特別型（畠地帶扱い手育成型）三会原第4地区による長崎県島原市長貫町に所在する長貫A遺跡の灌漑施設整備に伴う緊急発掘調査報告書である。

2 長貫A遺跡発掘調査に係るものとして、範囲確認調査についても概要と出土遺物について記載した。なお、範囲確認調査の期間は以下の通りである。

範囲確認調査期間 平成28年度 平成29年 2月22日

平成28年度 平成29年 3月3日

平成28年度 平成29年 3月27日

調査担当 島原市教育委員会社会教育課

主任 宇土 靖之

3 島原市教育委員会が主体となり、発掘調査及び整理・報告書作成作業を行った。各作業期間は次のとおりである。

本調査 平成31年度（令和元年度） 8月1日～8月31日

整理・報告書作成作業 平成31年度（令和元年度） 9月2日～1月31日

4 調査主体 島原市教育委員会 教育長 森本 和孝

教育次長 平山 慎一

社会教育課 課長 松本 恒一

調査担当 島原市教育委員会 主任 宇土 靖之

吉岡 慎文

（株）大信技術開発 調査員 竹田 将仁

調査協力 長崎県島原振興局・（株）島田組

5 発掘調査においては、基準点及びグリッド杭設置・遺構実測・土層実測・平面測量・空中写真撮影・調査支援を（株）大信技術開発に業務委託した。

6 発掘調査及び報告書作成にあたり、以下の方々にご教授いただいた。

片多雅樹（長崎県埋蔵文化財センター）・川道寛（新幹線文化財調査事務所）・寺田正剛（長崎県埋蔵文化財センター）・辻田直人（雲仙市教育委員会）・本多和典（南島原市教育委員会）・松元一浩（長崎県埋蔵文化財センター）・村子晴奈（雲仙市教育委員会）【五十音順・敬称略】

7 遺物洗浄・遺物注記・遺物接合・遺物実測・トレースは、荒木郁子・林聖子・吉田敏子の協力を得て島原市埋蔵文化財収蔵庫において行った。

8 写真撮影は吉岡・吉田が行った。

- 9 本書で用いた方位は全て平面直角座標系(第1系)による座標北(G.N)である。
- 10 発掘調査は以下の方々に従事していただいた。
木村光江・荒木恵子・姫田壽文・加藤健・中島輝幸・倉永新子・浅野克己・町田敏夫・倉永敏勝・永尾国治・森本正利・野田守彦・田浦哲也・中島太市
- 11 本調査による出土遺物は島原市埋蔵文化財収蔵庫に保管する他、一部については有明文化会館地階の大野原遺跡資料館「縄文の里」において展示される予定である。
- 12 本報告書においては『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
- 13 調査成果となる図面・写真等の記録は島原市教育委員会に保管している。
- 14 本書の執筆及び編集は、吉岡が行った。

凡 例

- 1 調査において検出した遺構には、遺構記号と数字を付している。本書において使用した遺構記号は以下の通りである。
土坑(落とし穴状遺構)…SK ピット…SP 風倒木、不明遺構…SX
- 2 本書に掲載した遺構実測図は、20分の1である。遺物実測図の縮尺は、土器は2分の1、3分の1である。石器は1分の1、2分の1、3分の1である。
その他、遺構の状況に応じて適宜その縮尺を設定して掲載した。
- 3 写真図版に掲載した遺構・遺物の縮尺は任意縮尺である。

本文目次

第Ⅰ章 遺跡の立地と環境	1
第1節 地理的環境・歴史的環境	1
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	3
第Ⅱ章 発掘調査の概要	5
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 調査の方法と経過	8
第3節 調査の概要	6
第Ⅲ章 検出された遺構と遺物	12
第1節 ピット	12
第2節 焼土(SX4)	16
第3節 落し穴状遺構(SK1)	16
第Ⅳ章 遺物	19
第1節 2層出土土器	19
第2章 2層出土石器	25
第3節 3層出土土器	26
第4節 その他の出土遺物	29
第Ⅴ章 まとめ	42
第1節 遺構について	42
第2節 遺物について	42
第3節 組織痕土器について	42
第4節 包含層について	43
第5節 さいごに	43

引用文献・主要参考文献

遺物観察表

写真図版

抄録・奥付

挿図目次

第1図	島原市位置図	1
第2図	長貫A遺跡周辺の遺跡地図	3
第3図	1985年調査時に確認された組織痕土器	4
第4図	三会原第4地区の範囲確認調査T P配置図	6
第5図	確認調査出土遺物実測図(S=1/2・1/1)	7
第6図	調査区全体平面図(S=1/300)	9
第7図	調査区南壁土層断面図(S=1/40)	11
第8図	調査区西壁土層断面図(S=1/40)	11
第9図	調査区中央部土層断面図(S=1/40)	11
第10図	SP1・2・3実測図(S=1/20)	12
第11図	SP4・5・6実測図(S=1/20)	13
第12図	SP7・8・9・10・11・12・13実測図(S=1/20)	14
第13図	SP4・SP6・SP13出土遺物実測図(S=1/3・1/2)	15
第14図	SX4実測図 (S=1/40)	16
第15図	SK1実測図 (S=1/20)	16
第16図	SK1土層断面状況	17
第17図	SK1出土遺物実測図 (S=1/2)	18
第18図	2層出土土器実測図 (S=1/2)	20
第19図	2層出土土器実測図 (S=1/2)	21
第20図	2層出土土器実測図 (S=1/2)	22
第21図	2層出土土器実測図 (S=1/2)	23
第22図	2層出土土器実測図 (S=1/2)	24
第23図	2層出土石器実測図 (S=1/2)	25
第24図	3層出土土器実測図 (S=1/3・1/2)	27
第25図	3層出土土器実測図 (S=1/2)	28
第26図	3層出土土器実測図 (S=1/2)	29
第27図	SX3出土土器実測図 (S=1/2)	29
第28図	表土出土土器実測図 (S=1/2)	30
第29図	表土出土土器実測図 (S=1/2)	31
第30図	搅乱出土土器実測図 (S=1/2)	34
第31図	搅乱出土土器実測図 (S=1/2)	35
第32図	搅乱出土土器実測図 (S=1/2)	36
第33図	搅乱出土土器実測図 (S=1/2)	37
第34図	搅乱出土石器実測図 (S=1/2・1/1)	38
第35図	搅乱出土石器実測図 (S=1/2)	39

表目次

第1表	長貫A遺跡周辺遺跡一覧表	3
第2表	範囲確認調査出土遺物観察表	40
第3表	遺構出土遺物観察表	40
第4表	2層出土遺物観察表	40
第5表	3層出土遺物観察表	40
第6表	SX3出土遺物観察表	40
第7表	表土出土遺物観察表	41
第8表	搅乱出土遺物観察表	41

写真図版目次

写真図版1	範囲確認調査TP48土層堆積状況(北より)
	範囲確認調査TP48土層堆積状況(東より)
写真図版2	範囲確認調査TP48出土遺物
	長貫A遺跡から眉山・普賢岳を望む
写真図版3	長貫A遺跡から有明海を望む
	調査区全景(頭上は北西)
写真図版4	南壁(西から)・南壁(東から)・西壁(南東から)・中央壁(北西から)・2層遺物出土状況 ・3層遺物出土状況・調査区東側ピット群検出状況・調査区東側ピット群完掘状況
写真図版5	SP1半截状況・SP1完掘状況・SP2半截状況・SP2完掘状況・SP3半截状況・SP3完掘状況・ SP4半截状況・SP4完掘状況
写真図版6	SP5半截状況・SP5完掘状況・SP6半截状況・SP6石器出土状況・SP6完掘状況・SP7半截状況・ SP7完掘状況・SP8半截状況
写真図版7	SP8完掘状況・SP9検出状況・SP9半截状況・SP9完掘状況・SP10検出状況・SP10半截状況 ・SP10完掘状況・SP11検出状況
写真図版8	SP11半截状況・SP11完掘状況・SP12検出状況・SP12半截状況・SP12完掘状況・SP13検出 状況・SP13半截状況・SP13完掘状況
写真図版9	SP4検出状況・SX4半截状況・SX4完掘状況・SK1検出状況・SK1半截状況・SK1完掘状況・ 調査区完掘状況・作業風景
写真図版10	SP4・SP6・SP13・SK1出土遺物
写真図版11	2層出土遺物
写真図版12	2層出土遺物
写真図版13	2層出土遺物
写真図版14	3層出土遺物
写真図版15	3層出土遺物
写真図版16	表土出土遺物
写真図版17	表土出土遺物
写真図版18	搅乱出土遺物
写真図版19	搅乱出土遺物
写真図版20	搅乱出土遺物

第Ⅰ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境・歴史的環境

(1) 地理的環境

長貫A遺跡が所在する島原半島は、長崎県南東部の有明海と橋湾に胃袋状に突き出した半島で、東西24km、南北32km、面積463m²、海岸線の総延長は130kmである。半島の中央部には雲仙岳を中心とした国立公園が広がっている。周囲には温泉地が散在しており、観光業も盛んな地域である。

島原市は半島東北部に位置し、西に雲仙市、南に南島原市と隣接している。また、有明海を隔てて東には熊本市、北には福岡県大牟田市が位置している。

島原半島は、地質・地形的に半島北部の雲仙火山地域と半島南部の南島原火山地域に大別できる。半島中央部に聳える雲仙岳は普賢岳を主峰とする更新世の複合火山で、角閃石安山岩を主要成岩としている。半島の4分の3を占める雲仙火山地域の溶岩円頂丘を中心として、北部・東部・南東部に火山性扇状地が発達し、裾野は有明海に延びている。半島南部の南島原火山地域は、第三紀層を玄武岩や安山岩を主体とする溶岩が覆う火山性台地がみられ、起伏に富む地形を成している。

雲仙岳は有史以前から活発な火山活動がみられており、有史以降においても火山活動が記録されている。江戸時代には寛文3年(1663)の古焼溶岩、寛政4年(1792)の新焼溶岩など溶岩の流出が知られている。中でも寛政4年4月朔日には火山活動に端を発して、島原城下近郊の眉山が山体崩壊を起こし、大量の土砂が有明海に流れ込み津波を誘発させた。このいわゆる「島原大変」と呼ばれる災害により、島原半島で約1万人、肥後、天草で約5千人が犠牲となった。また、平成2年にはじまった噴火活動も死者・行方不明者を出す火山災害となった。

このような火山災害の一方で、半島内の各所には湧き水が湧出しており、清らかな水を求めて遠方からの来島者も多い。また、火山灰土を含む土質ゆえに耕作も盛んであり、島原市周辺ではショウガやニンジンなどの根菜の栽培や白菜などの葉物野菜の栽培がおこなわれる県内有数の耕作地帯である。

此度調査を行った長貫A遺跡もこのような根菜を栽培する耕作地が多く、周囲には肉牛などの畜産を行う牧場もみられる。



第1図 島原市の位置

(2) 歴史的環境

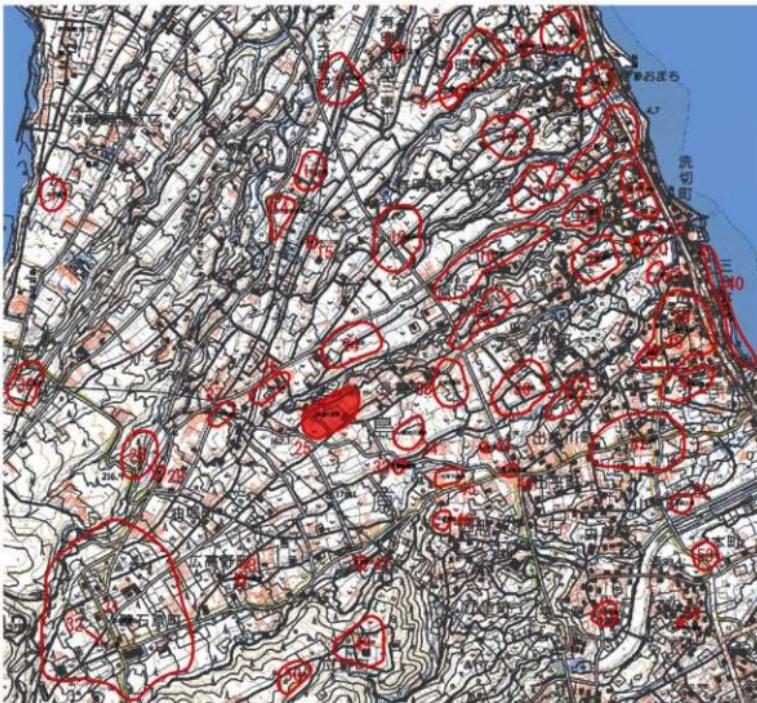
長貫A遺跡は島原市の中部に広がる畑作地帯に位置する。島原半島北東部では、旧石器時代から人々の営みが確認されている。島原市内においては旧石器時代の明瞭な遺跡は確認されていないが、一野遺跡出土の尖頭器が大野原遺跡資料館に展示されているほか、隣接する雲仙市においても、百花台遺跡・魚洗川遺跡・小ヶ倉遺跡・栗山遺跡などでナイフ形石器や剥片尖頭器、細石刃が確認されている。中でも百花台遺跡を標識遺跡とする百花台型台形石器は広く知られているところである。これら遺跡の調査結果から、旧石器時代の当該地域においては、一定領域に複数集団が存在し、狩猟を行い移動と離合集散を繰り返していたと考えられている。

なお、『長貫遺跡緊急調査概報』（島原市文化財調査報告書第3号）によれば、昭和32年7月の諫早水害直後に地元中学生が長貫でハンドアックスを2点発見したという。昭和33年に江坂輝弥氏が実見し、旧石器であるとの所見を示したという。その後、長貫遺跡は旧石器及び縄文時代の「周知の埋蔵文化財包蔵地」として長崎県の遺跡地図に登載されている。

今回の調査においては縄文時代早期から晩期にいたる遺物が確認された。よって以下、当該時期の状況について概観する。島原半島東北部においては縄文時代早期・後期・晩期の遺跡が多く確認されている。早期の遺跡としては、弘法原遺跡や百花台遺跡、礫石原遺跡、下油堀遺跡などから押型文土器が出土している。また、下油堀遺跡では、落とし穴状遺構が検出されているほか、石鏃やスクレイパーといった狩猟に用いた石器も多く出土している。このことから、縄文時代早期においては、山林を中心とした生活環境があったと想定される。

一方で、条痕文円筒形土器が出土した一野遺跡や畑中遺跡は標高が下る。これらの遺跡については有明海対岸との交流を示唆する遺跡として知られている。

後期から晩期にかけては、有明町の大野原遺跡・小原下遺跡・礫石原遺跡・肥賀太郎遺跡といった遺跡が確認されており、大野原遺跡では土器製造にかかわると考えられる遺構も確認されている。小原下遺跡では、縄文時代および弥生時代の住居址が確認されており、土偶などが出土している。晩期の遺跡の立地は、前半には標高50m以下に位置する畑中遺跡のような遺跡と、百花台遺跡といった標高200m以上の高地に位置する遺跡の両者が認められる。後半になると、礫石原遺跡や肥賀太郎遺跡といった高標高に遺跡が多い傾向にある。



第2図 長貫A遺跡周辺の遺跡地図

序号	遺跡名	種別	立地	時代	地図No.	遺跡名	種別	立地	時代
1	西岡遺跡	遺物貯藏地	台地	縄文	28	東原野遺跡	遺物貯藏地	台地	縄文
2	上野高野遺跡	遺物貯藏地	台地	弥生	29	一本松遺跡	遺物貯藏地	台地	縄文
3	小原下山遺跡	遺物貯藏地	台地	縄文	30	大原遺跡	遺物貯藏地	台地	縄文
4	小原上山遺跡	遺物貯藏地	台地	縄文	31	横山遺跡	遺物貯藏地	台地	縄文
5	國土神社裏現穴	丘陵	丘陵	六朝	32	蛭原南古墳	古墳	丘陵	古代
6	小原下山地点遺跡	遺物貯藏地	台地	縄文	33	大原北遺跡	遺物貯藏地	台地	縄文・弥生
7	小原下山遺跡	遺物貯藏地	丘陵	縄文・中世	34	南原北遺跡	遺物貯藏地	台地	縄文
8	松尾遺跡	遺物貯藏地	丘陵	古墳・古代	35	長原野遺跡	遺物貯藏地	台地	縄文・弥生
9	中野遺跡	遺物貯藏地	丘陵	古墳・古代	36	中野北遺跡	遺物貯藏地	台地	縄文・弥生
10	山ノ内遺跡	遺物貯藏地	丘陵	古墳・古代	37	二子中学校遺跡	遺物貯藏地	丘陵	縄文
11	一野原遺跡	遺物貯藏地	丘陵	縄文	38	大石古墳	古墳	台地	古墳
12	坂ノ内遺跡	遺物貯藏地	丘陵	縄文	39	猪塚古墳	遺物貯藏地	丘陵	弥生・古墳・古代・中世
13	下源在森野遺跡	遺物貯藏地	台地	縄文	40	三合子町畜舍中遺跡	遺物貯藏地	山地	縄文・弥生
14	上野在森野遺跡	遺物貯藏地	台地	縄文	41	下原遺跡	遺物貯藏地	台地	縄文・弥生・中世
15	坂ノ内・坂ノ内六石遺跡	丘陵	丘陵	縄文	42	猪塚古墳	遺物貯藏地	丘陵	縄文
16	原口日吉遺跡	遺物貯藏地	丘陵	弥生・古墳	43	人見古墳	古墳	丘陵	古墳
17	上牛野遺跡	遺物貯藏地	台地	弥生・古墳	44	鬼の原古墳	古墳	丘陵	古墳
18	荒幡山遺跡	墓場	河岸段丘	弥生	45	大原下遺跡	遺物貯藏地	台地	中世
19	中野川遺跡	遺物貯藏地	川床	弥生	46	押野遺跡	遺物貯藏地	台地	縄文
20	寺中城跡	城跡	丘陵	中世	47	灰窓遺跡	遺物貯藏地	台地	縄文
21	寺中城跡	城跡	丘陵	中世	48	中野北遺跡	遺物貯藏地	台地	縄文
22	寺中日吉遺跡	遺物貯藏地	平地	弥生・古墳	49	今野遺跡	遺物貯藏地	台地	縄文
23	寺中八幡跡	遺物貯藏地	丘陵	弥生	50	弓削遺跡	遺物貯藏地	丘陵	縄文
24	原口八幡跡	遺物貯藏地	台地	縄文・弥生	51	打原遺跡	遺物貯藏地	丘陵	弥生・古墳
25	長貫A遺跡	遺跡	縄文	縄文	52	鬼の古墳	古墳	平原	古墳
26	下池船形地	遺物貯藏地	河岸段丘	縄文・弥生	53	追田遺跡	遺跡	平原	弥生
27	上池船形地	遺物貯藏地	縄文	縄文	54	中野北遺跡	遺跡	平原	古代・中世
						その他の生糞遺跡(未記録)	その他		

第1表 長貫A遺跡周辺の遺跡一覧表

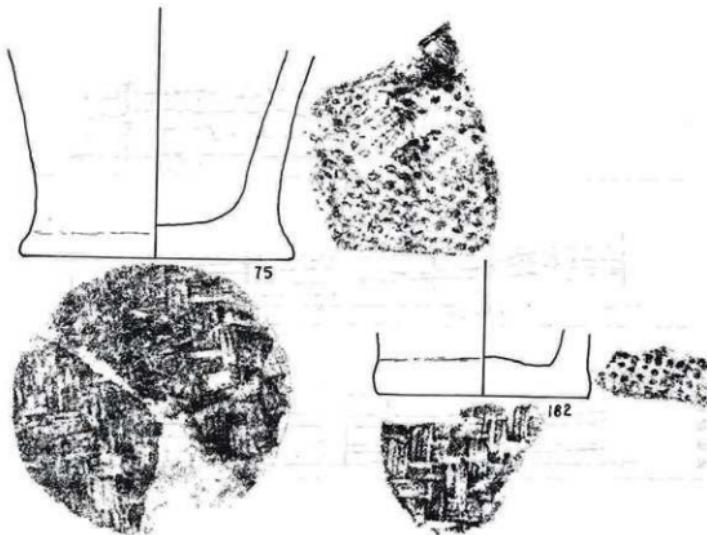
第2節 遺跡の概要

長貫A遺跡は、島原市長貫町に位置する遺跡である。昭和32年豪雨直後に地元中学生によりハンドアックス2点を表探し、慶應大学考古学研究室の江坂輝弥氏（当時）が実見。江坂氏が旧石器であると述べたという。これを地元の考古学者である古田正隆氏が『島原半島の古代文化－概説と年表』（島原観光社、1962）において言及し、長貫遺跡が旧石器を含む遺跡であると位置づけられた。

1982年に長崎県文化課による分布調査が実施され、「周知の埋蔵文化財包蔵地」として遺跡地図に登載された。（注1：長貫遺跡は西側の長貫A遺跡と東側の長貫B遺跡として登載されている。（長貫1986）

長貫遺跡に関わる調査としては、長貫遺跡調査団が牧場建設を原因として1985年10月1日より25日間にわたって約300m²において緊急調査が実施されている。

この調査では、縄文早期に位置付けられる押型文土器をはじめ、前期の轟B式、中期の阿高式、後期の三万田式などが出土している。また、押型文土器の中には組織痕を有するものも含まれている。



第3図 1985年調査時に確認された組織痕土器

『長貫遺跡緊急調査概報』（島原市文化財調査報告書第3号、1986、P34）

*スケールが不明のため、任意で縮小している

第Ⅱ章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経緯

(1) 水利施設等保全高度化事業特別型(畑地帯担い手育成型)三会原第4地区について

本事業は、畑地帯の農業近代化を進める基盤整備事業として、農道や用排水施設、区画整理等を総合的に実施することにより、事業の効果を相乗的に高め畑作經營の合理化、生産性の向上を図ることを目的としている。

島原市においては平成26年度に長崎県島原振興局から三会原地区の基盤整備事業の計画があると照会を受け、平成26年度より28年度まで確認調査を行い、結果を長崎県島原振興局まで報告した。

その後、平成30年度に島原振興局より、基盤整備の一環として長貫A遺跡内に水路を整備する旨、照会があった。そこで、島原振興局農村整備課・島原市教育委員会で協議をした結果、水路整備範囲の中でも確認調査の結果、遺構及び包含層の存在が想定できる300m²において本調査を実施することで合意した。

今回報告する調査は、長貫A遺跡範囲内の用排水路建設のために遺跡が消滅する部分について、長崎県島原振興局より委託を受けて行ったものである。

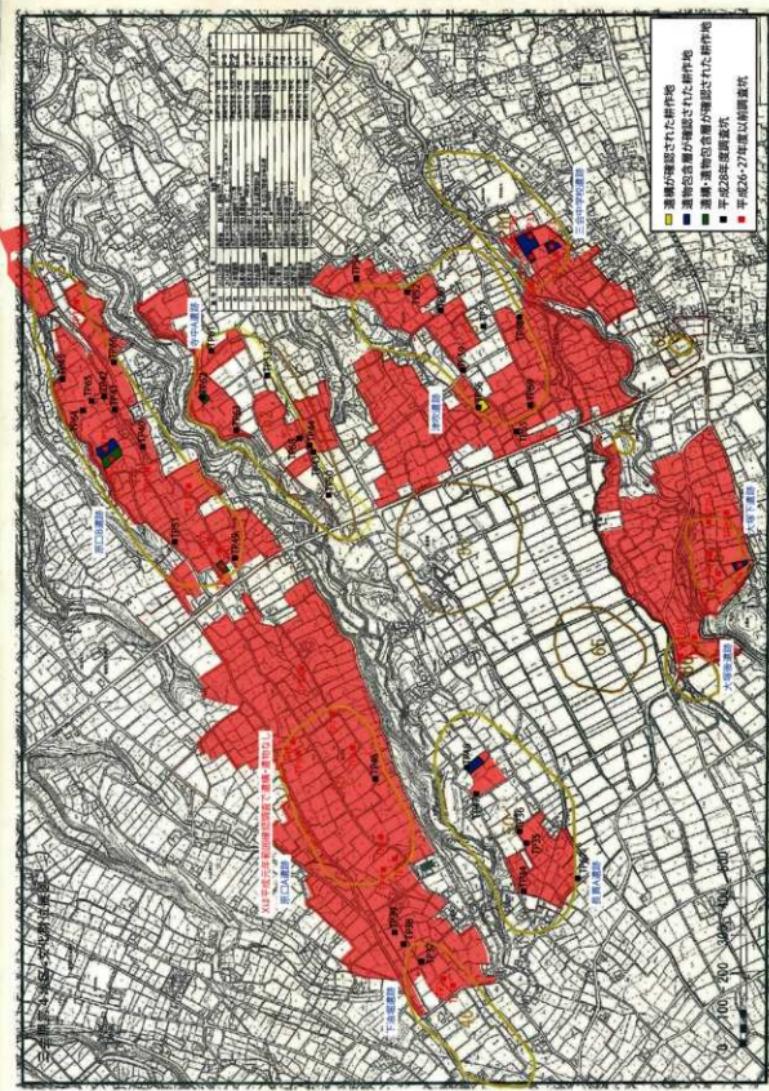
(2) 確認調査について

三会原第4地区農地整備事業に先立ち、平成26年度より28年度にかけて範囲確認調査を実施した。整備計画範囲に含まれる周知の埋蔵文化財包含地は9件で、69カ所において確認調査を行った。

長貫A遺跡においては5カ所にTPを設定し、確認調査を行った。その中で、TP48においては表土下に遺物包含層が確認された。遺構は確認されなかったものの、包含層からは縄文土器の底部をはじめ、磨製石斧が出土した。この結果を踏まえ、掘削深度が包含層に及ぶ場合は発掘調査が必要である旨を長崎県島原振興局へ報告した。

その後、TP48周辺に水路を整備する計画が決まり、水路計画区域において本調査を実施することとなった。

第4図 三会原第4地区の範囲確認調査丁戸配置図



(2) 確認調査における出土遺物

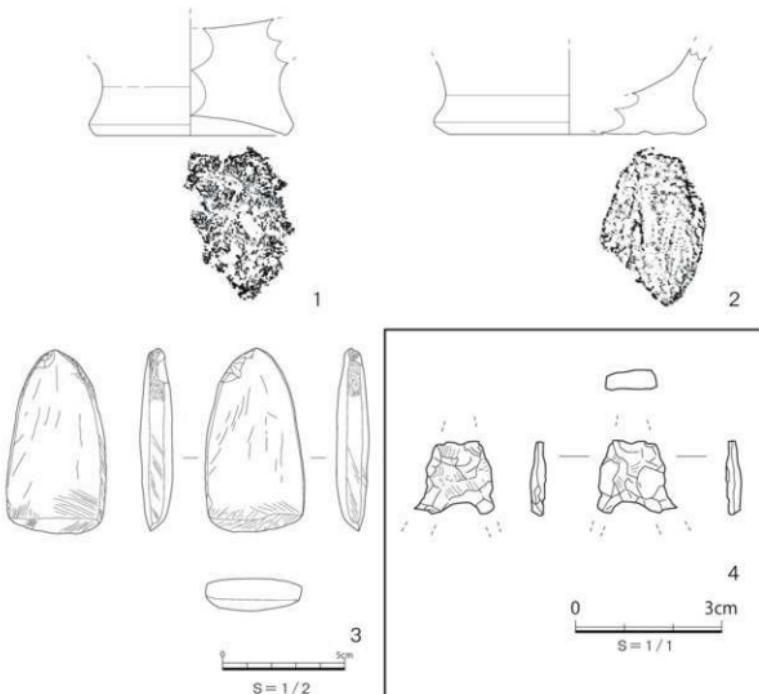
確認調査においてTP48より出土した主な遺物は以下の通りである。

1・2は縄文土器の底部である。**1**は内面外面ともにナデ調整が施される。焼成はやや悪い。摩耗により判然としないが、脚部は三角状に張り出すものと考えられる。底面はやや底上げされており、内面にはススが付着している。

2も内面外面ともにナデ調整が施されている。底面は平底で外側に張り出す形状を呈している。

3は蛇紋岩製の磨製石斧である。最大長7.1cm、最大幅4.1cmと小ぶりな石斧である。両面より研磨して刃部を作出している。基部にやや加工の粗さが見られるが、全体的に丁寧な研磨がみられる。

4は黒曜石製の石鎌である。基部に抉りを持つ。側縁は直線的に整形されている。脚部と先端部を欠損する。



第5図 確認調査出土遺物(S=1/1・1/2)

第2節 調査の方法と経過

(1)調査の方法

今回の調査は、農地基盤整備事業に伴う水路整備地300m²を調査対象地として実施した。調査地に4m×4mの小グリッドを設置した。

表土掘削は、農地整備工事の一環として(株)鳥田組のバックホウにて、畑地の表土20cm程を島原市文化財担当者の立ち会いのもとで掘削した。その後、島原市で残る表土を除去した。

調査区周辺は河岸段丘の上部に位置しており、半島でも有数の畑地として知られる。これまで幾度かの造成がなされていると考えられ、全体的に耕作による削平や耕作機械による搅乱を受けており、包含層の残存状況は良好とは言えなかった。

調査においては、世界測地系を使用し、中グリッドメッシュ(20m単位)と小グリッドメッシュ(4m単位)を設定した。

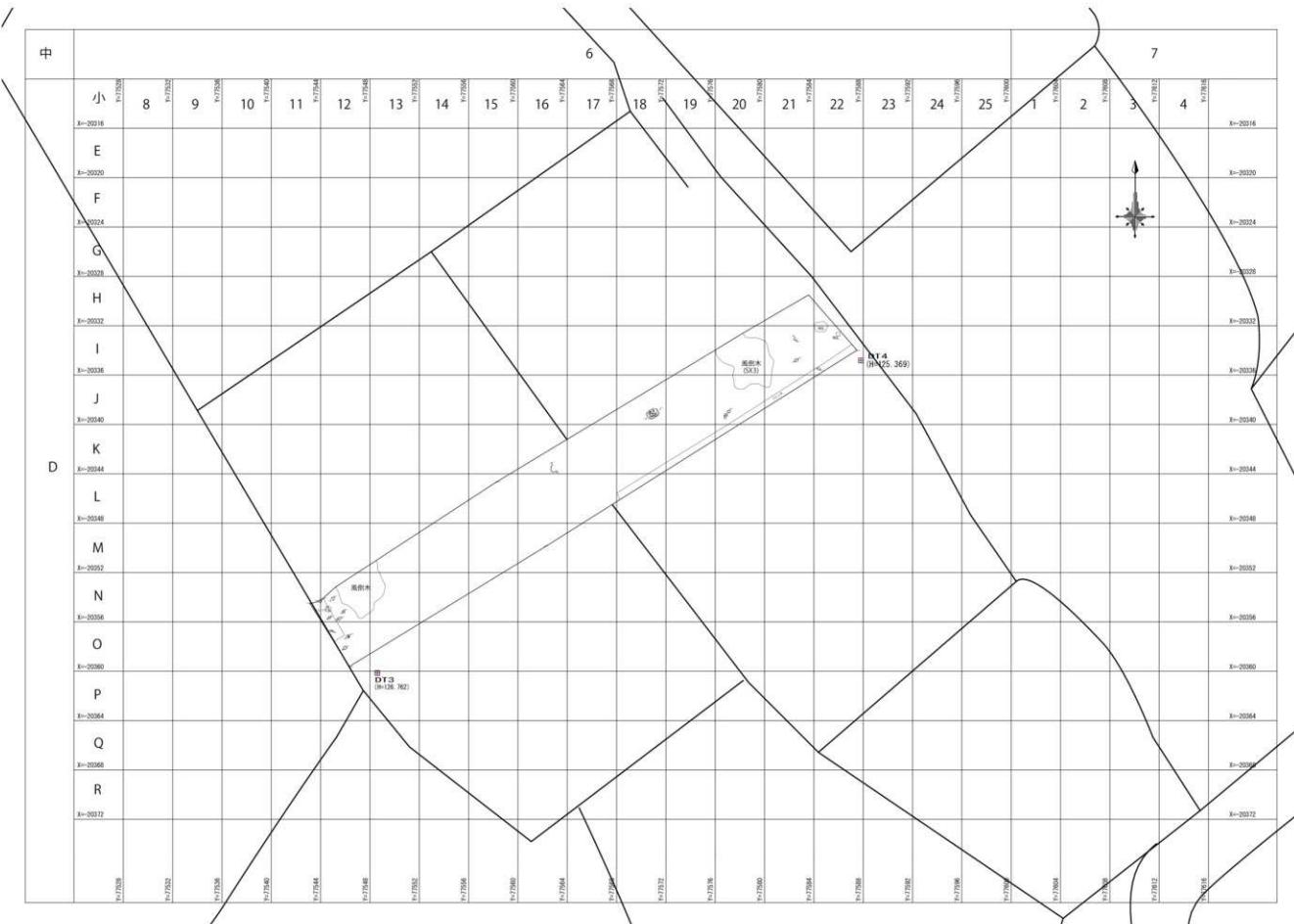
調査区東側においては表土直下に7層(基盤層)の堆積がみられた。これは畑地の造成に伴って削平・搅乱を受けたものと考えられる。ただし、掘り込みが7層に及ぶピットが数基確認されたため、人力掘削が困難な4～6層は重機掘削によって除去し、7層において遺構検出を行った。

調査区中央部には、やや2層が残存していたため、重機掘削を中止し、遺構検出を行いS X 5を検出した。また、S X 2も検出したが、堆積状況から地形の落ち込みであると判断した。

調査区西側も東側は耕作による削平を受けており、西側5m程に2層が残存している程度であったが、5層検出時にSK 1を検出した。2層には縄文時代早期～晩期までの土器が含まれていた。また、当初は包含層と認識していなかった3層からも縄文時代早期の押型文土器が出土したことから、3層も包含層として調査を行うこととし、4層(カシノミ層)を完掘面とした。

(2)調査の経過

7月24日(水)	長崎県振興局・(株)鳥田組(本体工事受託者)・島原市教育委員会 の3者による協議を現地において行う。調査区の範囲、掘削深度 などの協議を行った。
7月31日(水)	本体工事に伴う表土掘削(掘削深度GL-25cm)
8月1日(木)	重機搬入 重機による表土掘削
8月2日(金)	作業員による包含層の掘削開始
8月6日(火)	台風8号接近
8月7日(水)	SK 1検出
8月9日(金)	重機搬出
8月23日(金)	空中写真撮影
8月26日(月)	地元CATV現場取材
8月31日(土)	調査現場撤収
9月2日(月)	島原市埋蔵文化財収蔵庫において整理作業を開始
12月27日(金)	整理作業終了



第6図 調査区平面図 (S=1/300)

第2節 基本層序（第7図～第9図）

今次調査で確認された長貫A遺跡の土層堆積状況は、以下の通りである。

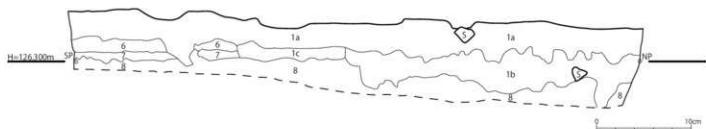
- 1 a 層 黒褐色土 (Hue10YR2/3)
1 b 層 しまり有、粘性有。（耕作土）
暗褐色土 (Hue10YR3/4)
しまり極めて弱、粘性弱。人頭大の礫含む。4層（カシノミ層）をブロックで含む。耕作による攪乱と考えられる。
- 1 c 層 黒褐色土 (Hue10YR2/3)
しまり弱、粘性弱。局所的に6層をブロック状に含む。耕作による攪乱と考えられる。
- 1 d 層 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
しまり有、粘性弱。褐色土 (Hue10YR4/4) を10%程含む。
- 1 e 層 黒褐色土 (Hue10YR2/2)
しまり有、粘性弱。1mm～5mmの礫10%程含む。
- 1 f 層 黒褐色土 (Hue10YR3/1)
しまり強い、粘性弱。1mm～1cmの中粒砂を含む。
- 2 層 褐色土 (Hue10YR4/4)
しまり強、粘性有。1mm～1cmの礫2%程含む。縄文土器を含む遺物包含層
- 3 層 黒褐色土 (Hue10YR2/2)
しまり強い、粘性有。1mm～5mmの礫1%程含む。縄文土器を含む遺物包含層
- 4 層 灰黄褐色土 (Hue10YR4/2)
しまり非常に強い、粘性弱。粒径10cm以下の火山性粗礫～粗石を50%程含む。
いわゆる“かしのみ層”
- 5 層 オリーブ褐色礫層 (Hue2.5YR4/3)
しまり非常に強い、粘性弱。粒径1cm以下の中礫を主体とする。礫石原火碎流層
の上位に位置付けられるものと考えられる。
- 6 層 暗オリーブ褐色土 (Hue5Y4/3)
しまり非常に強い、粘性弱。粒径1cm以下の中礫を主体とする。礫石原火碎流層
の下位に位置付けられると考えられる。
- 7 層 黒褐色土 (Hue10YR3/2)
しまり非常に強い、粘性有。褐色粘質土 (Hue10YR4/4) を3%程含む。1mm～3
mmの礫を15%程含む。
- 8 層 黒褐色土 (Hue10YR2/2) しまり有、粘性有。2mm程の白色粒1%程含む。

* 1 b 層については、調査区東壁面際に10cm幅で帶状に堆積していた。1 c 層上面より堆積したと推測されるが、当該層の残存状況から断定はできなかった。ただし、1 b 層の下位に3・4層がなく、周囲の7層と合致するという堆積状況から、畑地の開拓及び耕作による攪乱層と認識した。

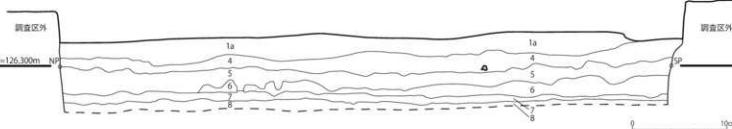
* 1 d 層・1 e 層・1 f 層は風倒木痕の埋土である。



第7図 調査区南壁土層断面図(S=1/40)



第8図 調査区西壁土層断面図(S=1/40)



第9図 調査区中央部土層断面図(S=1/40)

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

第1節 ピット

(1) 概要

今回の調査において、計13基のピットが検出された。著しい削平がみられた調査区東側では、7層において9基が集中して検出された。これらのピットの配列が何らかの遺構に伴うものなのかは判然としない。

また、埋土中より縄文時代早期の押型文が確認できたピットもあれば、縄文時代晚期の黒色磨研土器が確認できたピットもあることから、これらピットには時期差があることも考えられる。

(2) 各ピットの概要

S P 1

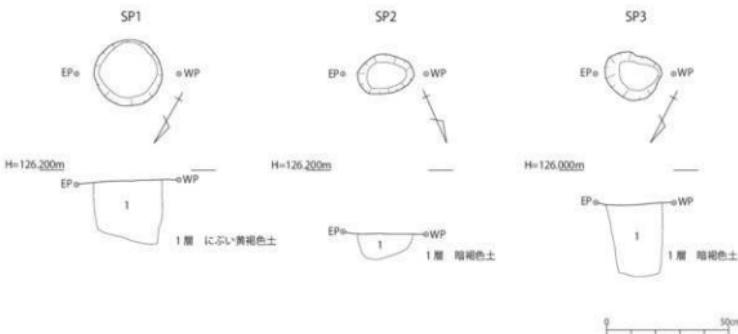
S P 1は、西側の調査区7層において検出した。直径28cm、検出面から底部までの深さは26cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土 (Hue10YR4/3) を主体としつつ、1~5mm大の礫を15%含む。また、黒褐色土 (Hue10YR2/2) も20%程含む。断面はU字型を呈している。

S P 2

S P 2は、西側の調査区7層において検出した。長軸23cm、短軸16cm、検出面から底部までの深さは10cmを測る。プランは梢円形を呈す。埋土は暗褐色土 (Hue10YR3/3) を主体とする。断面はU字型を呈している。

S P 3

S P 3は、西側の調査区7層において検出した。長軸23cm、短軸19cm、検出面から底部までの深さは31cmを測る。埋土は暗褐色土 (Hue10YR3/4) を主体として、黒褐色土 (Hue10YR2/3) を30%程含む。断面はU字型を呈している。



第10図 S P 1・2・3 実測図 (S=1/20)

SP 4

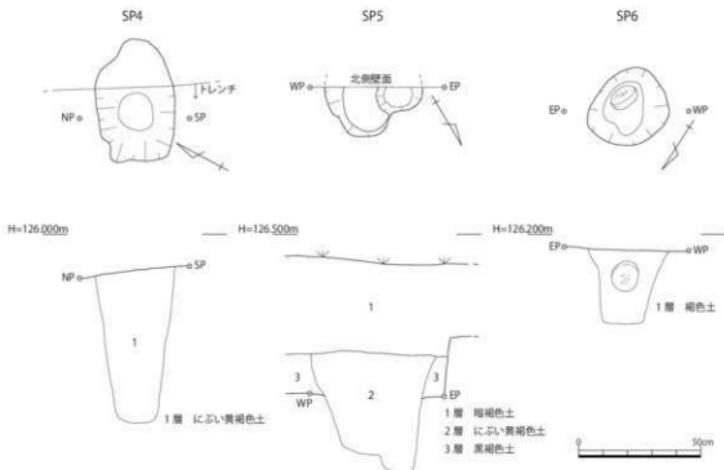
S P 4は、西側調査区の東側に掘削したトレンチ内の7層において検出した。長軸49cm、短軸31cm、検出面から底部までの深さは64cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土(Hue10YR4/3)を主体として、黒褐色土(Hue10YR2/3)を30%程含む。断面はU字型を呈している。

SP 5

S P 5は、西側調査区の東側に掘削したトレンチ内の北壁際、7層において検出した。長軸40cm、短軸20cm、検出面から底部までの深さは49cmを測る。埋土は3層に分層できた。1層は、暗褐色土(表土)である。2層が埋土で、にぶい黄褐色土(Hue10YR4/3)を主体として、黒褐色土(Hue10YR2/2)を15%程含む。3層は、黒褐色土(Hue10YR2/2)である。プランはダルマ型を呈しており、抜柱痕である可能性もある。

SP 6

S P 6は、西側調査区の東側の7層において検出した。長軸33cm、短軸32cm、検出面から底部までの深さは31cmを測る。埋土は褐色土(Hue10YR4/4)を主体として、黒褐色土(Hue10YR3/2)を7%程含む。断面はやや漏斗状を呈しており、埋土中からは磨石1点が出土した。



第11図 S P 4・5・6実測図 (S=1/20)

SP 7

S P 7は、東側調査区の東側の7層において検出した。長軸29cm、短軸23cm、検出面から底部までの深さは61cmを測る。プランは楕円形を呈す。埋土はにぶい黄褐色土(Hue10YR4/3)を主体として、黒褐色土(Hue10YR2/2)を30%程含む。断面はU字型を呈している。

SP 8

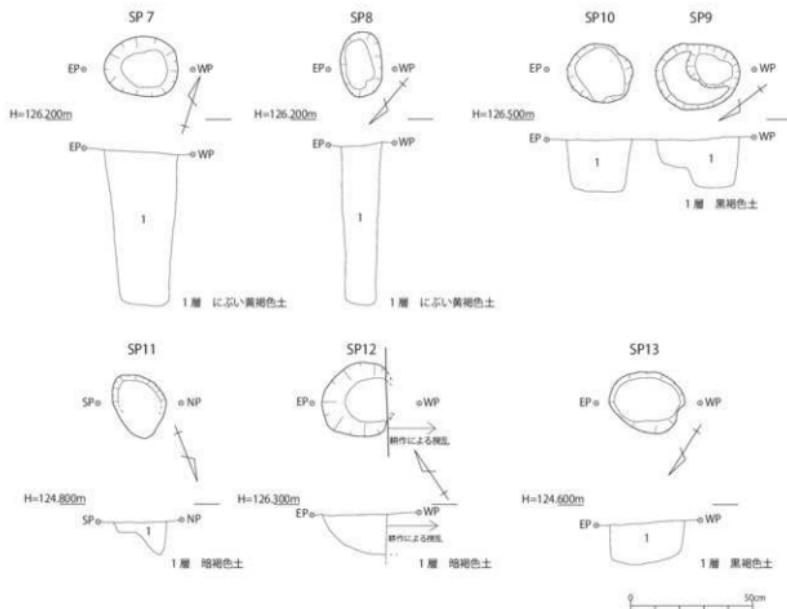
SP 8は、西側調査区の東側の7層において検出した。長軸26cm、短軸16cm、検出面から底部までの深さは62cmを測る。プランは楕円形を呈す。埋土はにぶい黄褐色土(Hue10YR4/3)を主体として、黒褐色土(Hue10YR2/2)を10%程度含む。断面はU字型を呈している。

SP 9・SP 10

SP 9及びSP 10は、東側調査区の南側の4層において検出した。SP 9は長軸33cm、短軸26cm、検出面から底部までの深さは20cmを測る。SP 10は長軸26cm、短軸23cm、検出面から底部までの深さは20cmを測る。いずれも埋土は黒褐色土(Hue10YR2/2)を主体とする。SP 9の断面は、西側に落ち込んでいる。SP 10の断面はU字型を呈している。

SP 11

SP 11は、東側調査区の南側、2層において検出した。長軸25cm、短軸27cm、検出面から底部までの深さは13cmを測る。埋土は暗褐色土(Hue10YR3/3)を主体とする。断面では北側が深い。



第12図 SP 7・8・9・10・11・12・13実測図 (S=1/20)

SP 12

SP 12は、西側調査区の北側、7層において検出した。長軸28cm、短軸25cm、検出面から底部までの深さは16cmを測る。1/4程は耕作に伴う搅乱を受けている。埋土は暗褐色土(Hue10YR3/4)を主体とする。断面は、U字型であったと想定される。

SP 13

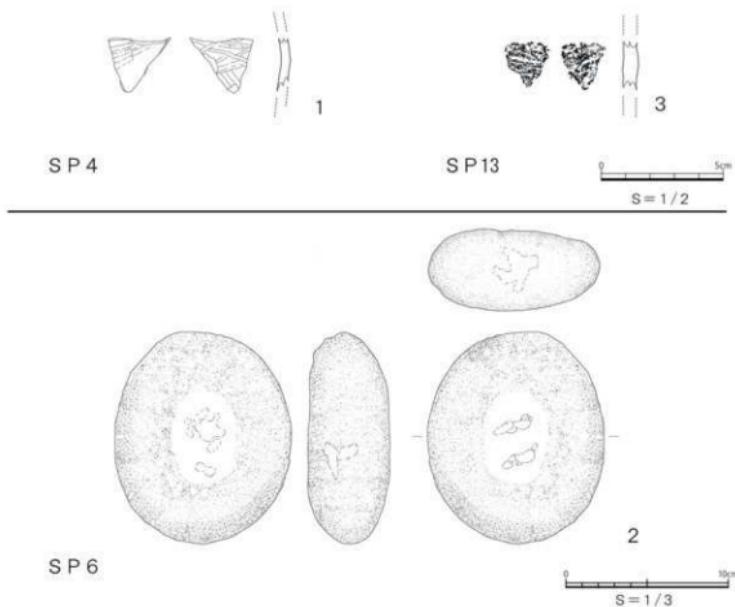
SP 13は、東側調査区の南側、4層において検出した。長軸30cm、短軸24cm、検出面から底部までの深さは16cmを測る。1/4程は耕作に伴う搅乱を受けている。埋土は黒褐色土(Hue10YR2/3)を主体とする。断面は、U字型であったと想定される。

(3) 出土遺物

1は、SP 4の埋土中より出土した黒色磨研土器の欠片である。胎土は長石・角閃石・金雲母からなり、内面・外面ともにミガキの痕がみられる。器厚は3mmと薄い。

2は、SP 6の埋土中より出土した安山岩製の磨石あるいは敲石である。上側面、左側面、両平面に使用痕を有する。

3は、SP 13の埋土中より出土した深鉢の土器片である。内面・外面ともにナデ調整がされており、外面は橙色、内面は黒褐色を呈している。



第13図 SP 4・SP 6・SP 13出土遺物実測図(S=1/3・1/2)

第2節 焼土（S X 4）

S X 4は、2層上面において検出した。調査区の東側で包含層がかろうじて残存している範囲に確認された。ただし、耕作機械による搅乱を受けていたこともあり、平面全体の検出はできなかった。遺構の幅は27cm、焼土の深さは4cmを測る。焼土中には炭化物粒も確認できた。遺構中からの遺物の出土はなかたため遺構の年代は不明である。遺構周囲には熱を受けたとみられる礫や炭化物などが散在していたことから、焼土との関連も考えられる。



第14図 S X 4 実測図
(S=1/40)

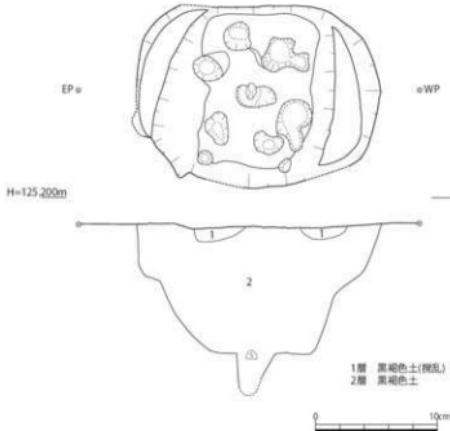
第3節 落とし穴状遺構（SK 1）

（1）概要

SK 1は、5層上面で検出した遺構である。長軸に1m、短軸75cmの橢円形のプランを呈している。検出面からの深さは67cmを測り、5層を掘り込んでいた。両端には検出面より20cmほどの深さでテラス状に段が設けられていた。埋土中からは、押型文を有する土器片が9点出土した。

遺構半截時に底部中央に更なる掘り込みがみられたことから、落とし穴遺構の可能性も視野に入れ、土層を5cm幅でスライスし土層観察を行った。（状況は第16図）

スライスの過程において、土層に逆茂木痕とみられる堆積は確認できなかった。ただし、底部9箇所のピットが確認できたことから、落とし穴である可能性も否定できない。



第15図 SK 1 実測図 (S=1/40)



SK 1 検出状況



SK 1 (半截)



SK 1 (半截位置より5cm)



SK 1 (半截位置より10cm)



SK 1 (半截位置より15cm)



SK 1 (半截位置より20cm)



SK 1 (半截位置より25cm)

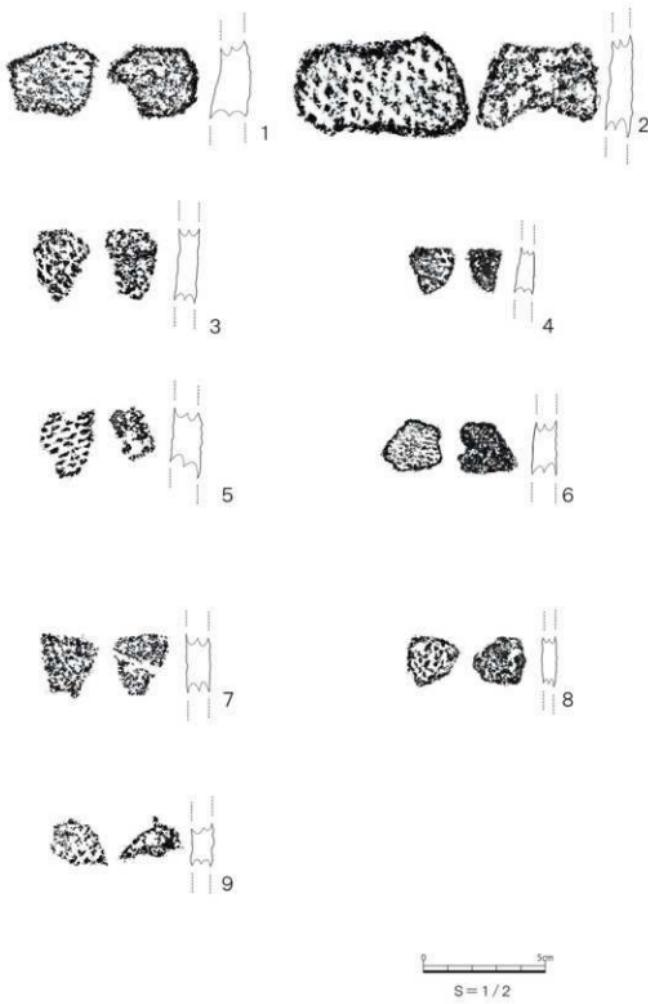


SK 1 (完掘状況)

第16図 SK 1 土層断面状況

(2) SK 1 出土遺物

以下はSK 1の埋土中より出土したものである。1・2・3・4・5・7・9は摩耗が著しいが、いずれも橢円押型文が施文されていることが確認できる。



第17図 SK 1出土遺物実測図 (S=1/2)

第IV章 遺物

第1節 2層出土土器

本調査地点においては、畑地造成による削平や耕作機械による搅乱で、含包層(2層)の残存状況は良好とは言えなかつたが、出土遺物の中から実測に耐えうる遺物を掲載する。2層からは縄文時代早期の押型文土器の他、縄文時代後期・晚期の土器も確認されてゐる。

(1) 押型文土器

1・2は、深鉢の口縁部である。

1は、直線的に立ち上がり、口唇部は平坦につくられている。外面から内面の口縁端部より1.5cmのところまで連続して楕円押型文が施文される。

2は、口縁部に向けて緩やかに外反する。外面は口縁端部より3cm程度ナデ調整を施し、その下位に横位の楕円押型文を施文する。内面は、口縁端部より1cm程度原体条痕を施し、その下位に楕円押型文を施文する。

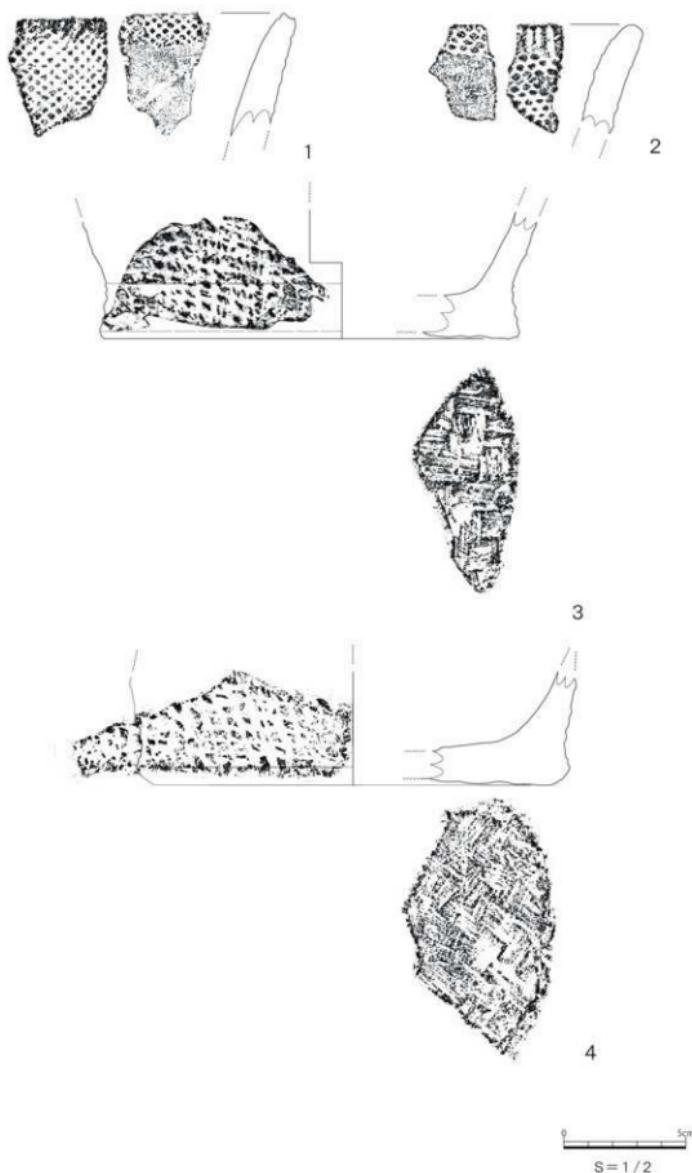
3～5は、深鉢の底部である。いずれも内面の底部はユビオサエで調整がされていると思われる。3・4の底面には3本ないし4本を1単位とする網代状の組織痕が認められる。いずれも外面には斜位の楕円押型文が施文されており、3においては復元径で17.8cmを測る。3・4とともに胎土には石英・長石・角閃石・雲母を含むが、2～3mm大の粒が目立つ。これと同様の組織痕は1985年の調査においても確認されている他、弘法原遺跡(1983・1992)などでも確認されている。

5は復元径で7.7cm、底部の器厚は9mmを測る。胎土には石英・長石・角閃石・雲母・赤色砂粒を含む。1mm大の粒が主体であるが、5mm大ほどの石英や長石もみられる。外面の一部に斜位の楕円押型文がみられる。

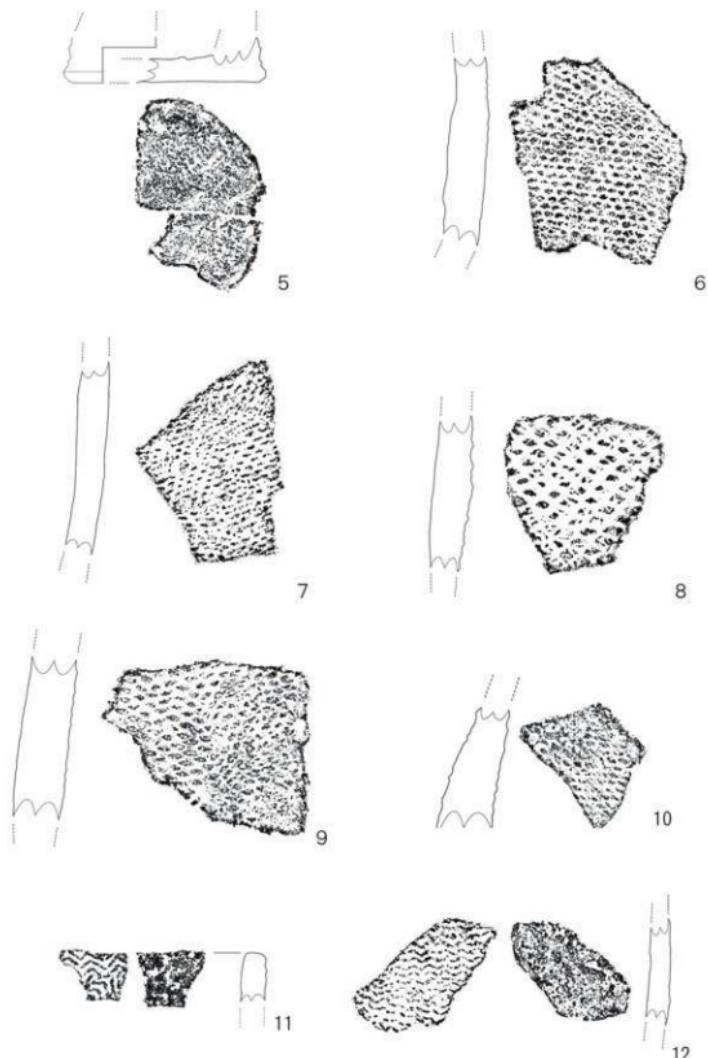
6～8は、深鉢の胴部である。6は器厚1.6cmを測る。内面はナデ調整、外面には横位と斜位の楕円押型文が施文される。内面上部はわずかに外反している。7は、器厚1.1cmを測る。内面はナデ調整、外面は横位の楕円押型文が施文される。8は、器厚1.5cmを測る。内面はナデ調整、外面は粗大な楕円押型文を横位に施文する。

9・10は、調査区中央部の地形の落ち込み部分(SX2)で出土した深鉢の胴部である。9・10ともに、外面に横位と斜位の楕円押型文を有し、内面はナデ調整である。器厚は分厚く2cmを測る。外面内面ともに摩耗、剥離がみられる。

11・12は、山形押型文の資料である。11は、口縁部である。口唇部はやや丸みをおび、外面は横位に施文した後、その下位は斜位に施文する。内面はナデ調整を施す。12は、胴部の資料である。外面は斜位の山形押型文を施文し、内面はナデ調整である。



第18図 2層出土 押型文土器 ($S=1/2$)



第19図 2層出土土器実測図 (S=1/2)

(2) 条痕文土器

13~17は、条痕文を有する資料である。

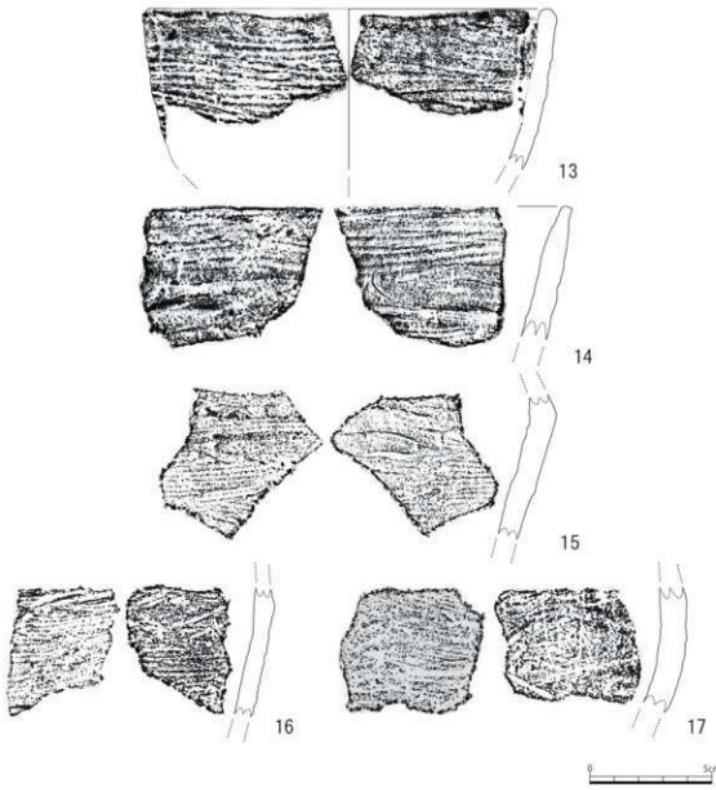
13・14は口縁部である。13は、口縁部で復元径は17.0cm、器高は8mmを測る。外面は横位の貝殻条痕文、内面はナデ調整を施す。

14は、口縁部に向かって外反しつつ器厚が薄くなる。口唇部はナデ調整によりつくられる。外面は条痕文を有し、内面には、横位の条痕も確認される。

15・16・17は胴部の資料である。15は、丸みを持ちながら屈曲する。外面には横位の条痕が確認でき、屈曲部の内面はナデ調整が施され、その下位には横位に櫛目状の条痕が確認できる。

16も15同様に屈曲するが、屈曲する角度は緩やかである。外面には横位の条痕を有し、内面はナデ調整が施される。

17も外面に条痕を有し、内面はナデ調整が施される。



第20図 2層出土土器実測図 ($S=1/2$)

(3) その他の土器

18は深鉢の底部である。底径は9割が残存しており、径は12cm、底部の器厚は10.1cmを測る。器形は底部より内彎したのち外側に立ち上がるるものと考えられる。外面内面ともにナデ調整が施され、施文は確認できない。外面は黄橙色、内面は灰白色を呈する。

19・20は、同一個体もしくは同系統の資料と考えられる。

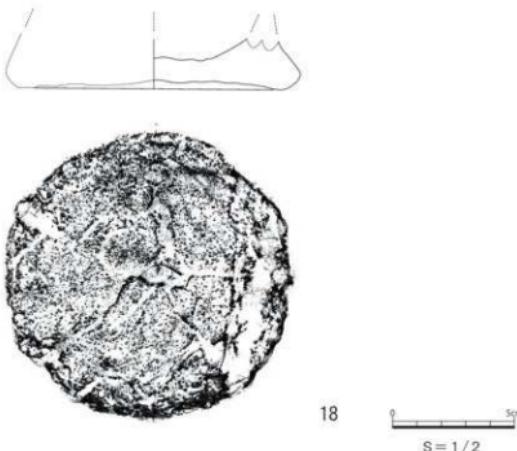
19は蝶ネクタイ状の装飾を有し、装飾の中心に垂下沈線を引き、この沈線を中心に放射状に沈線を施す。内面、外面ともにナデ調整が行われているが、擦過痕も認められることから工具を用いた調整も想定される。器形は、蝶ネクタイ状装飾をより上部へは大きく外反する。20は、横位の沈線が1条確認できる。調整は19と同様である。(肥賀太郎 2006)でも同種の資料が「島原半島の黒川式並行期でもっとも特徴的な器形の深鉢」として紹介されている。

21は浅鉢の胴部の張り出し部分の資料である。屈曲する角度は75°を測る。外面はヘラケズリによる丁寧な調整が行われ、内面はナデ調整が行われる。

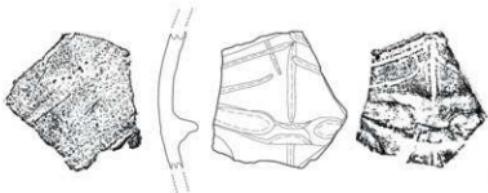
22～24は黒色磨研土器の資料である。22は口縁部で、口縁端部より1cmほど下に4mmほどの幅を持つ帯状の突起をつける。外面、内面はミガキ調整がみられるが、口唇部は黒色を呈しておらず、ケズリ調整とみられる。

23は頸部である。外面が外反したのち丸みをもって内彎する。

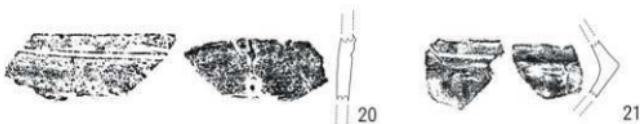
24はどの部位にあたるのかよくわからないが、屈曲のしかたから浅鉢の底部と判断した。外面は底部の中心から放射状に丁寧にミガキ調整がなされている。内面は外面のようなミガキはみられず、ケズリ調整と考えられる。



第21図 2層出土土器実測図 (S=1/2)



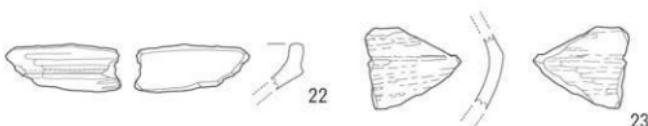
19



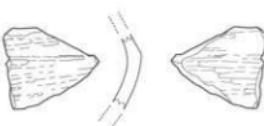
20



21



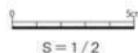
22



23



24



S = 1/2

第22図 2層出土土器実測図 (S=1/2)

第2節 2層出土石器

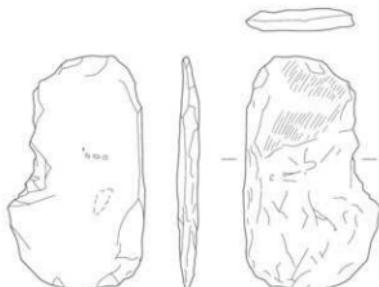
今次調査においては主に土器が出土し、石器の出土は剥片を主とする状況であった。2層から出土した石器の中から実測に耐えうる資料を以下に掲載する。

磨石

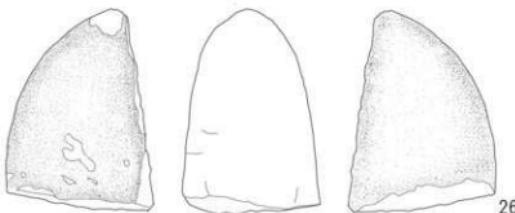
25は、砂岩製の磨石の一部で、長さ7.9cm、幅5.9cm、厚さ5.5cmを測る。使用痕と思われる摩耗が確認できる。

石材

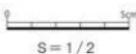
26は、板状の安山岩の石材である。長さは9.5cm、幅5.7cm、厚さ1.0cmを測る。縁辺部に摩耗が見られるが、刃部調整と考えられる調整もみられることから、扁平打製石斧と推測される。



25



26



第23図 2層出土石器実測図 (S=1/2)

第3節 3層出土土器

黒褐色土主体の3層は從来の調査においては包含層と認識していなかった。実際に2017年に実施した下油堀遺跡の発掘調査においても同等の層位（下油堀4層相当）について調査を行ったが、遺物は確認できなかった。しかし、今回の長貫A遺跡の調査においては遺物の出土が確認された。出土量は2層に比べて減少するが、出土遺物の多くは押型文土器であり、縄文時代早期頃の層位と考えてよいだろう。

27は、深鉢の口縁部である。口縁部に向かって外反し、外面には楕円押型文が施文される。楕円文は小さく密度が高い。胎土には、石英・長石・角閃石・雲母・軽石を含んでおり、焼成は良好である。

28は深鉢の口縁部である。口縁部に向かって直線的に立ち上がり、口唇部は丸みをもってナデ調整が施される。外面は楕円押型文が程化され、内面はナデ調整。焼成は良好である。

29は、深鉢の口縁部である。口縁部に向かってやや外反する。外面は楕円押型文を施し、口唇部から内面にかけてはナデ調整である。

30は、深鉢の口縁部である。口縁部に向かって直線的に立ち上がるが、口唇端部付近でやや外反する。口唇部はナデ調整により平坦部を作り出す。外面にはやや粒が大きい楕円押型文が施され、内面はナデ調整が施される。

31は、胴部資料である。外面には横位と斜位の楕円押型文が施文され、内面はナデ調整が施される。焼成は良く、胎土には長石を多く含むみ、37と同一個体である可能性もある。

32は胴部資料である。外面には斜位の楕円押型文が施され、内面はナデ調整である。胎土に2mm～4mm大の長石を含み焼成はやや悪い。

33は、胴部資料である。外面には斜位の楕円押型文、内面はナデ調整である。内壁が上部に向かってやや外反する。

34は胴部資料である。外面は楕円押型文が施文されるが、／方向と＼方向への施文が確認される。内面はナデ調整が施される。胎土には石英・長石・角閃石・雲母を含むがいずれも粗粒である。

35～37は、トレンチ掘削中に出土した深鉢である。出土状況から同一個体と考えられるが、直接接合できなかったため、個別に3点掲載する。

35は口縁部であり、外面には山形文、内面口縁部には原体条痕を施文し、原体条痕の下位に楕円押型文を施文する。口縁の復元径は41.0cmを測る。

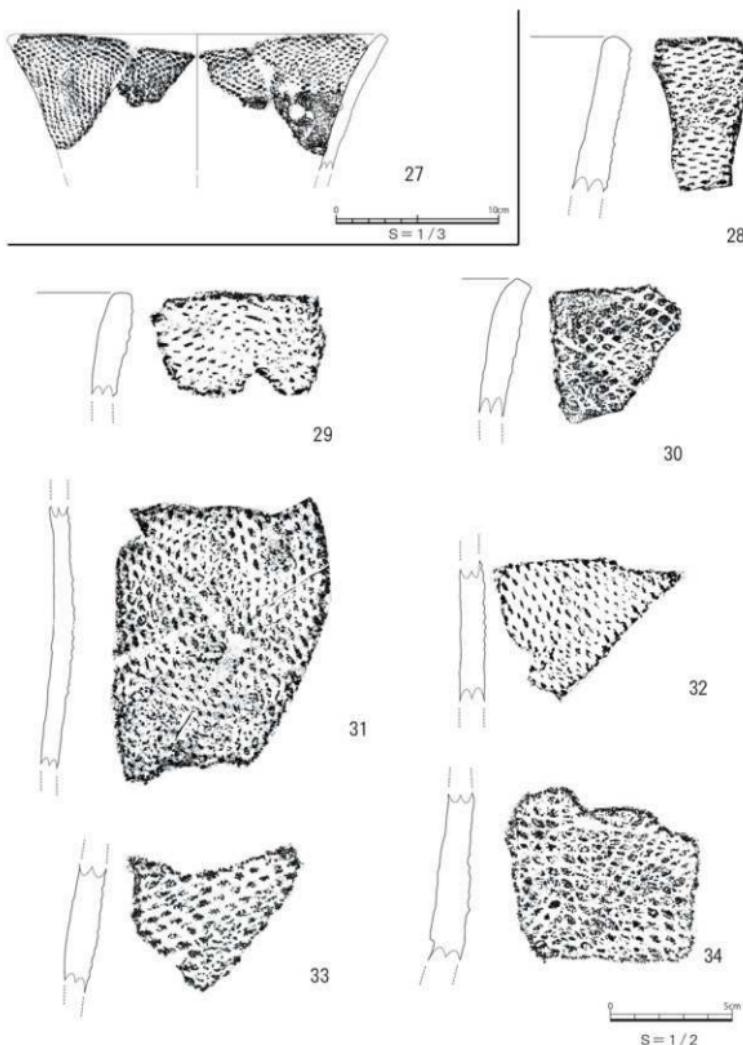
36・37は胴部である。底部に向かって内湾していくことから、全体の器形は砲弾型に近い形状もしくは狭脚の平底を呈していたと推測される。胎土には石英・長石・角閃石・雲母を含み、外面は橙色、内面はにぶい黄橙色を呈する。

38は、深鉢の口縁部である。外面には山形押型文が施文される。口縁部より3cmまで横位に施文され、それ以下では／方向に施文される。内面はナデ調整である。器形は口縁部に向かってやや外反しているが、おおむね直線的な立ち上がりをみせる。

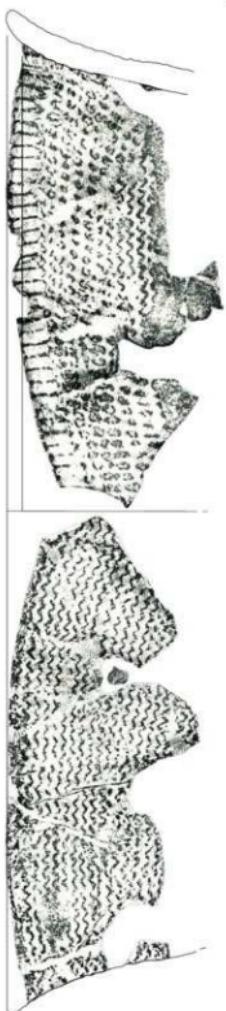
39は、口縁部である。外面は横位の山形押型文、内面はナデ調整が施され条痕が残

る。おおむね直線な立ち上がり、口唇部から端部には丸みをもつ。

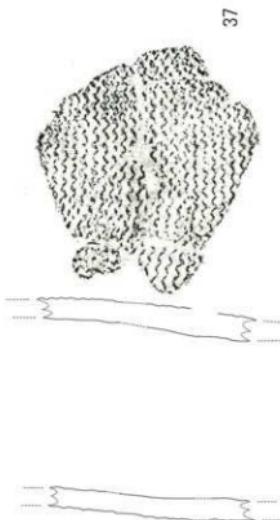
40は、条痕文を有する胸部資料である。外面には\方向へ粗い条痕を残し、内面はナデ調整が施される。上部に向かって外反して立ち上がる。胎土には細かい石英粒と長石粒を多く含む。



第24図 2層出土土器実測図 ($S=1/2 \cdot 1/3$)



35



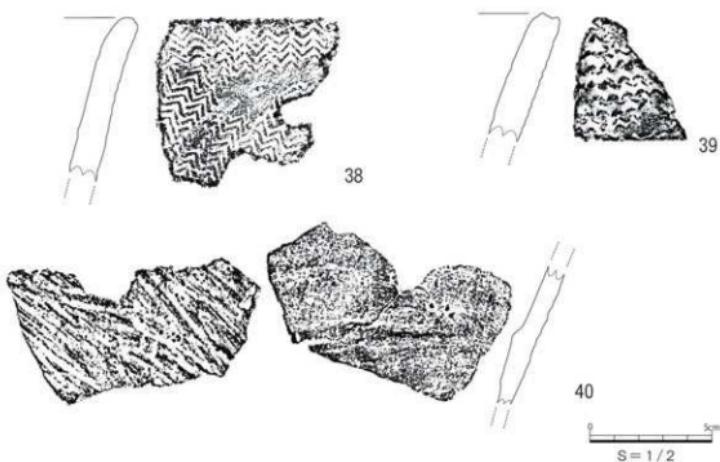
36



37

$S = 1/2$
5cm

第25図 3層出土土器実測図 ($S=1/2$)



第26図 3層出土土器実測図 ($S=1/2$)

第5節 その他の出土遺物

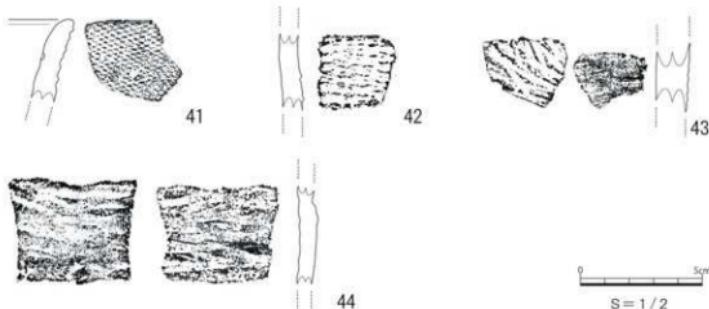
(1) S X 3 (風倒木痕) 出土遺物

41は、深鉢の口縁部で外面に横位の扁平な楕円押型文を有し、内面はナデ調整が施される。口縁部に向かって直線的に立ち上がる。口唇部の状況から、端部をナデ調整した後に外面と内面の調整が行われたと考えられる。

42は撫糸文を有する資料である。外面に横位の撫糸文が施文され、内面はナデ調整である。

43は、外面に沈線状条痕を有し、内面はナデ調整が施されている。

44の外面には条痕をナデ消す調整がなされており、内面はナデ調整が施される。緩やかに内湾するが、外面は上部で弱い屈曲がみられる。



第27図 S X 3 出土土器 ($S=1/2$)

(2) 表土出土遺物

土 器

今回の調査対象地は、畑地造成や耕作により、表土にも多くの遺物が含まれていた。以下、特徴的な資料を掲載する。

45は弥生土器の口縁部である。内面外面ともにナデ調整が施されるが、外面のナデ調整は内面に比べると粗く、横位の条痕が確認できる。

46～50は、縄文土器の口縁部である。いずれも口縁部に刻目を持つ資料である。

46は、胴部は緩やかに膨らみ、口縁にむかって外反する。外面はナデ調整、内面はミガキ調整が施される。

47は、内面外面ともにナデ調整が施される。口縁部の下に刻目を有する突帯が貼り付けられている。焼成は悪く、口縁端部は摩耗している。

48は、外面に櫛目状の沈線を有し、内面にも外面よりは浅い横位の条痕を有している。器形は、口縁部にむかって緩やかに外反する。

49は、外面は摩耗し明瞭ではないが、かすかに横位の条痕が確認できる。内面はナデ調整が施される。口縁部にむかってやや内湾しながら立ち上がり、口縁部は肥厚する。端部は丁寧なナデ調整によって平坦部がつくられる。

50は、外面に横位に櫛目状の沈線を有し、内面はナデ調整である。器形は内湾しながら立ち上がり、口縁部付近で外反する。端部はナデ調整で平坦につくられている。

51は、底部の資料である。復元した底径は9.0cmを測る。外面はナデ調整が施され、底部外面は三角形に外側に張り出し、底面は平底である。

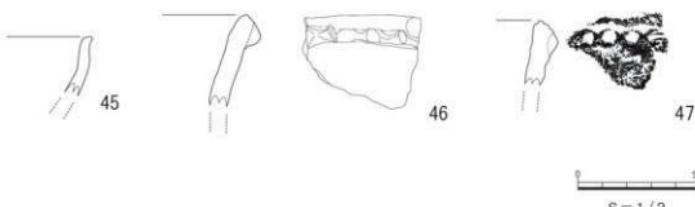
52・53は胴部の資料である。

52は、外面に斜位の条痕を有し、内面はナデ調整が施される。直線的に立ち上がる器形と推測される。

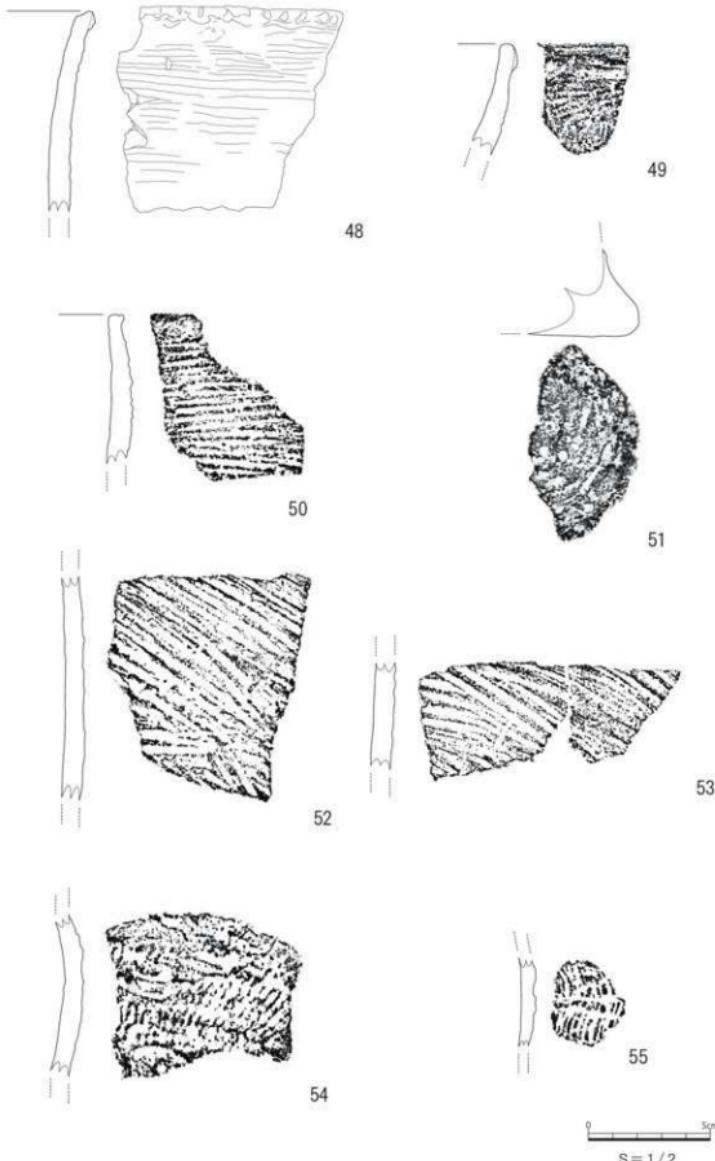
53も、外面に条痕を有し、内面はナデ調整が施される。52に比べると条痕が浅い。

54は、内面にナデ調整が施される。外面にはネガティブ櫛円文のような痕が確認できるが、調整が粗い部分も認められる。施文を意識して施されたと考えるよりは、組織痕のように偶発的についた文様と考える方がよいかもしれない。

55も外面に組織痕と考えられる肋骨状の文様が確認できる。内面はナデ調整が施される。



第28図 表土出土土器 (S=1/2)



第29図 表土出土土器 (S=1/2)

石 器

石鎌

56・57は、石鎌である。56は黒曜石製の石鎌である。長さ2.2cm、幅2.1cm、厚さ0.5cmを測る。基部に深い抉りを持ち、長脚に作出する。側縁はややふくらみをもって整形される。先端部を欠損する。57は、安山岩製の石鎌で長さ2.1cm、幅1.4cm、厚さ0.3cmを測る。脚部と先端部を欠損する。側縁は直線的に整形されている。

石斧

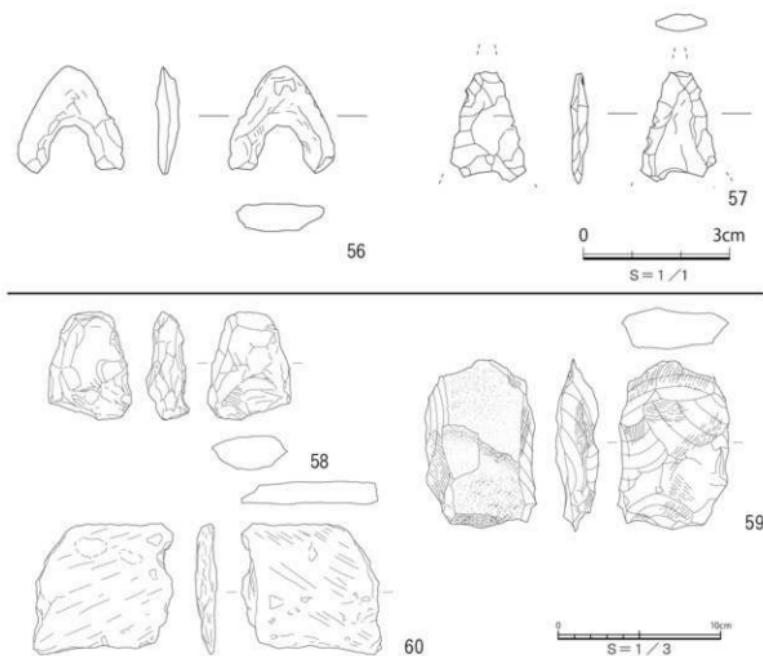
58は、長さ6.5cm、5.4cm、厚さ2.0cmを測る。剥離痕が確認でき、打製石斧の基部と推測される。

石核

59は安山岩の石材である。長さ10.4cm、幅6.9cm、厚さ2.6cmを測る。

石材

60は、結晶片岩の石材である。長さ8.2cm、幅は8.1cm、厚さは1.2cmを測る。縁辺部に摩耗が見られる。



第30図 表土出土石器 (S=1/1・1/3)

(3) 搅乱出土遺物

土 器

今回の調査対象地の大部分にトレンチャーによる搅乱がみられた。また、調査区の東側には畑地の整備に伴うとみられる搅乱が南北方向にみられた。これら搅乱部分からも比較的の残存状態の良い遺物が出土したため、以下で紹介する。

61・62は押型文を有する土器片である。**61**は外面に横位の山形押型文を有し、内面はナデ調整が施される。口縁部にむかって直線的に立ち上がり、端部は丸みをもつ。**62**は、外面にきめ細やかな梢円押型文を有し、内面はナデ調整が施される。

63～67は刻目突帯あるいはレース状の装飾を有する土器片である。**63**は、口縁部に向かって内湾しながら外に開きながら立ち上がる。口縁端部の内側は面取りぎみにナデ調整が施される。外面は擦過痕を残す粗いナデ調整、内面もナデ調整が施される。**64**も**63**と同様の器形であるが、器厚はやや薄い。口縁端部の内側は**63**のようにナデ調整で面取りされている。外面は擦過痕を残す粗いナデ調整、内面は丁寧なナデ調整が施される。**65**は口縁部を欠損しているものの、口縁部にむかって内湾しながら立ち上がるものと思われる。外面は↖方向に条痕を有し、内面はナデ調整である。口縁部下にヘラ刻みによる突帯を有している。

66・67は口縁部から外面にむかってレース状の装飾がみられる土器片である。**66**は、口縁部にむかってやや内湾しつつ外に開く。レース状をなす刻目はヘラ刻みによるものである。外面は装飾以下はナデ調整、内面も同じくナデ調整が施される。**67**は、**65**に比べて器厚が厚く、装飾の張り出し方も顕著である。いずれも胎土に石英・長石・金雲母を含む。

68は、浅鉢の口縁部である。口縁部にむかって内湾しながら立ち上がり、口縁部は玉縁状を呈している。外面、内面ともにはナデ調整で、外面胴部側に稜線を有する。内面は玉縁状口縁下部にくびれがみられる。また、胴部側には稜線が発達している箇所も確認できる。器形から(肥賀太郎2006)のB類に属するものと思われる。

69・70は浅鉢の口縁部である。**69**は、復元径で25.7cmを測る。外に張り出した部分から口縁部にむかって直線的に立ち上がるが、やや内湾している箇所もみられる。口縁部は丸みをもつものの、端部はやや平坦につくられる。外面と内面ともにナデ調整が施される。**70**は、復元径で29.2cmを測る。**69**に比べると張り出す部分の屈曲が強く、口縁部にむかっても強い内湾がみられる。張り出し部分を境に口縁部にむかって肥厚する。口縁部は外反し、丸みをもっている。外面内面ともに丁寧なナデ調整が施される。

71・72は、外面に擦過痕を有する土器片である。**71**は口縁部の資料である。胴部側でく状にゆるく屈曲し、器厚も口縁部側に比べるとやや厚い。器形は、口縁部にむかってやや内湾しながら立ち上がる。口縁部は丸みをもつ。外面には擦過痕がみられ、内面には↖方向に沈線状の条痕がみられる。**72**は、外面に複雑な文様を有する資料である。擦過痕がみられるため、基本的にはナデ調整であると考えられるが、一部に原体がわからない文様を残す。この文様は、深い沈線が刻まれるが、規則性が認められるようには考えられない。また、沈線で囲まれた区画内にはネガティブな梢円文がみられる。一方、内面は丁寧なナデ調整が施されている。器形は中央部で内側に屈曲し、器厚は薄くなる。

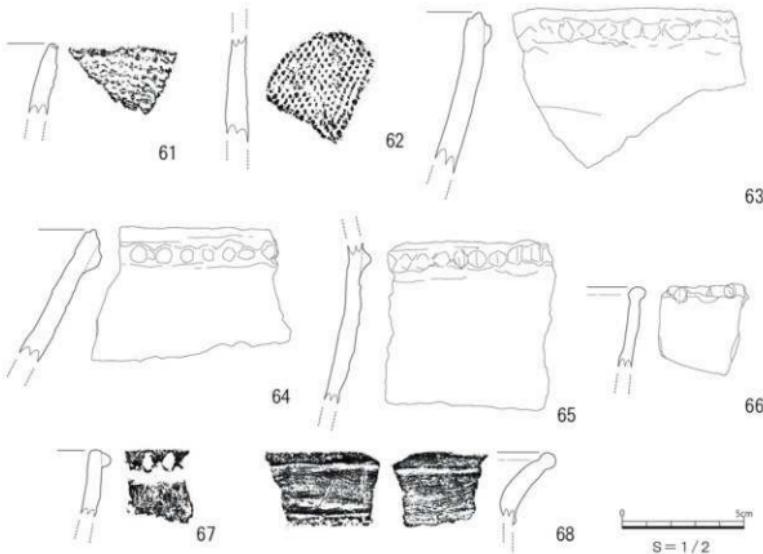
73～75は、条痕を有する資料である。73は、上部にむかって直線的に立ち上がる。外面に斜位の条痕を有し、内面はナデ調整が施される。74も斜位と横位の条痕を有しているが、横位の条痕についてはナデ消している。内面はナデ調整で施される。75は、張り出し部から緩い屈曲するをみせる。外面は摩耗がみられるが、横位の条痕が確認できる。内面はナデ調整が施される。胎土は石英・長石・角閃石・雲母が多く含まれ、やや粗い。

76は、刻目突帯を有する浅鉢の胴部資料である。外面内面ともにナデ調整が施されるが、突帯内面はユビオサエ(指頭圧痕)がみられる。突帯には3～5mm間隔でヘラ刻みによる刻目が施されている。胎土には2～3mm大の石英粒と長石粒を多く含む。

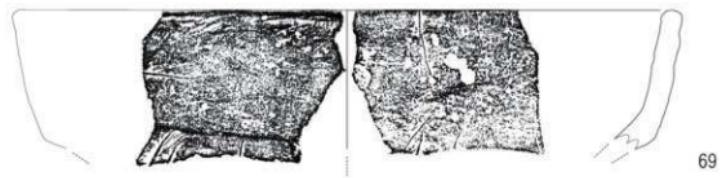
77は、口縁部の資料である。口縁部にむかって緩やかに外反しながら立ち上がる。器厚は口縁部にむかって薄くなり、端部はナデ調整により平坦部を作り出している。外面には、6条の沈線が施されるが、口縁部に近い2条は端部を作り出す際に部分的にスリ消されている。内面は丁寧なナデ調整が施される。

78～80は底部の資料である。78は、底径は9.3cmを測る。外面の形状は三角形に外側に張り出し、底面は上げ底である。外面には横位の条痕が確認され、底面はナデ調整が施される。79も78同様、外面は外側に張り出し、底面は上げ底を呈している。外面、内面ともにナデ調整が施される。80は、粘土の繋ぎ目から剥離した土器片と考えられる。底面は平底を呈する。外面、内面ともにナデ調整である。

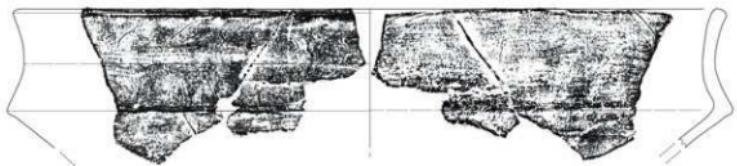
81は弥生土器の土器片である。外面は丹塗りが僅かに残存している。内面はナデ調整が施されている。器厚は5mm程と薄い。小片のため、器種は判然としない。



第31図 掘乱出土土器 (S=1/2)



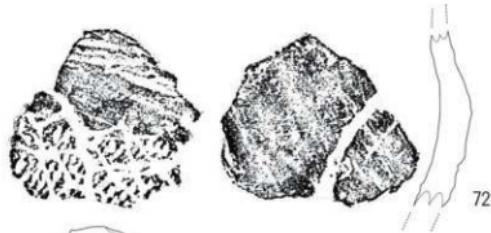
69



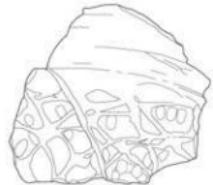
70



71

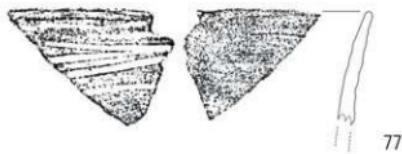
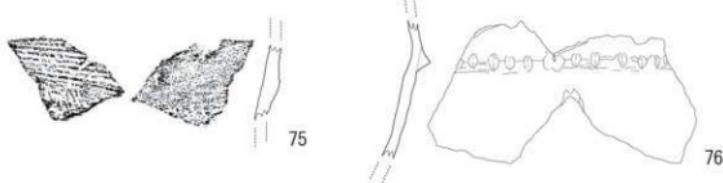
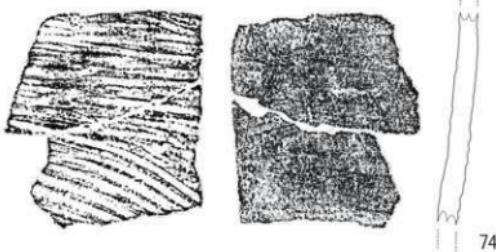
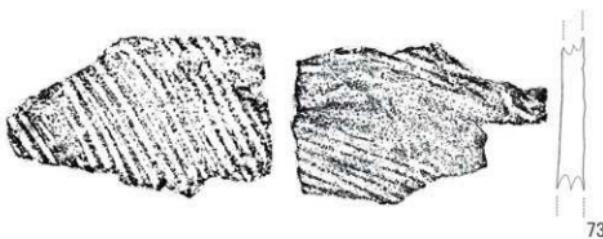


72



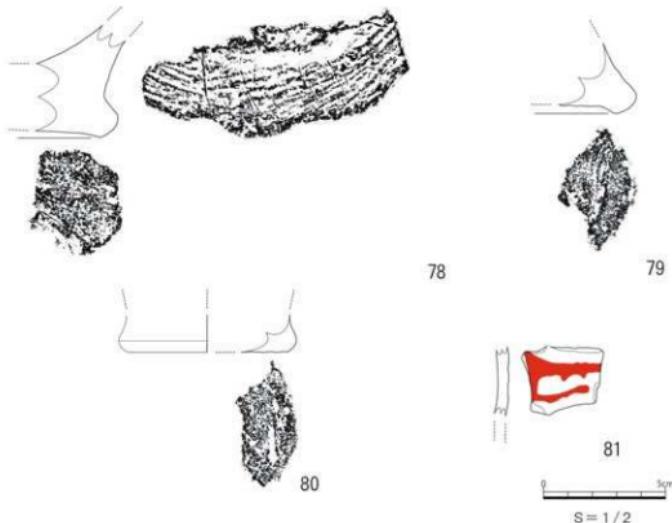
0 5cm
S = 1/2

第32図 搅乱出土土器 (S=1/2)



0 5cm
S = 1/2

第33図 搪乱出土土器 (S=1/2)



第34図 搅乱出土土器 (S=1/2)

石 器

石鎌

82は、黒曜石製の石鎌である。基部にやや深い抉りをもち、側縁は緩やかに湾曲する。脚部を欠損する。

石斧

83は、安山岩製の磨製石斧である。長さは、10.9cm、幅4.2cm、厚さは1.4cmを測る。基部は欠損しており、片面は被熱によるものと考えられる変色と刃部にススが付着している。基部から刃部にむかって屈曲している。

磨石

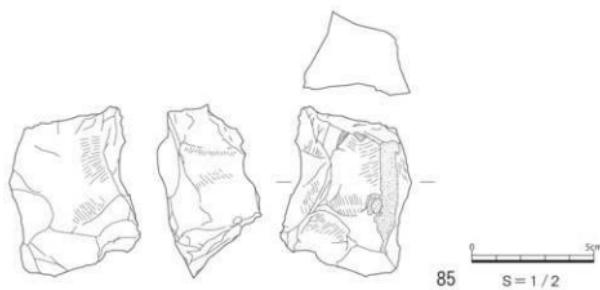
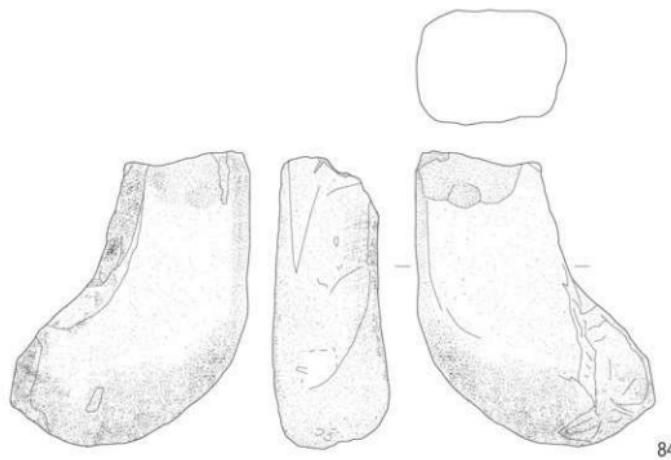
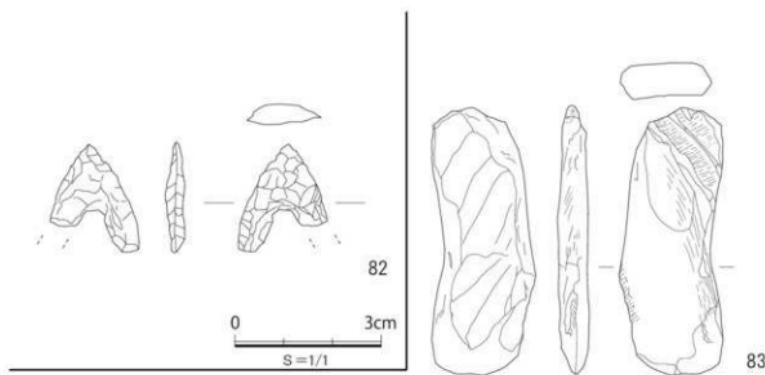
84は、磨石である。長さ13.2cm、幅8.4、厚さ5.1cmを測る。

石核

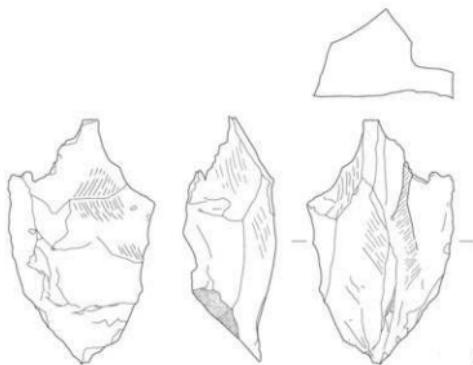
85・86は、安山岩の石核である。長さ6.3cm、幅4.9cm、厚さ3.5cmを測る。62は長さ10.2cm、幅6.1cm、厚さ3.5cmを測る。

石材

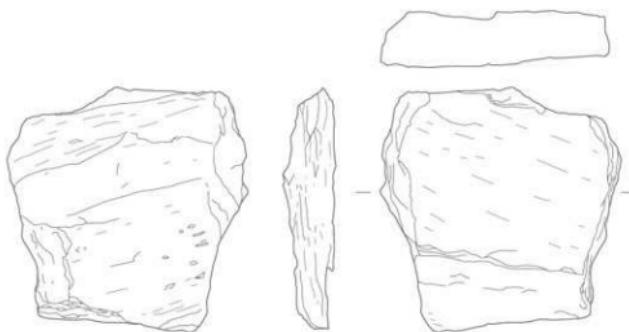
87・88は、結晶片岩の板状石材である。87は長さ10.0cm、幅9.7cm、厚さ2.0cmを測る。88は長さ9.0cm、幅9.3cm、厚さ3.4cmを測る。



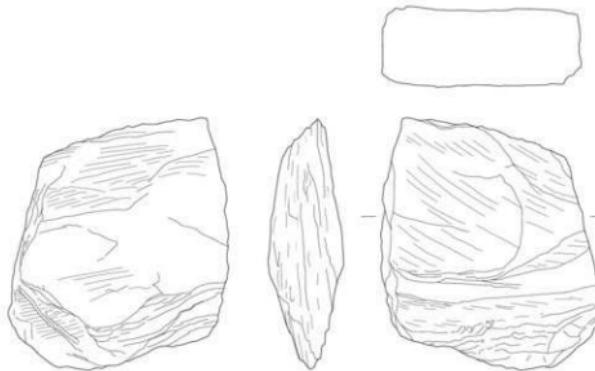
第35図 搅乱出土石器 (S=1/1・1/2)



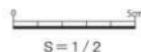
86



87



88



第36図 搅乱出土石器 (S=1/1・1/2)

遺物觀察表

第2表 範圍確認調査出土遺物觀察表

第3表 清構出土遺物觀察表

固 形 番 号	基 礎 構 造	出 土 地 点	出 土 年 代	出 土 目 標	調査・文書		測量	後成	出土	備考
					馬場	内堀				
21	1. 沖縄	L22	2	—	ナギ	ナギ	〔三〕内堀重複 〔二〕内堀重複	〔一〕内堀重複	馬場	石室、角門石、西
	2. 沖縄	L22	2	—	ナギ	高床式重複、ナギ	〔三〕内堀重複	〔一〕内堀重複	馬場	石室、角門石、西
	3. 沖縄	L22	2	—	ナギ	ナギ	〔三〕内堀重複	〔一〕内堀重複	馬場	石室、角門石、西
	4. 沖縄	J10	2	—	ナギ	ナギ	〔三〕内堀重複	〔一〕内堀重複	馬場	石室、角門石、西
	5. 沖縄	J12	2	—	ナギ	ナギ	〔三〕内堀重複	〔一〕内堀重複	馬場	石室、角門石、西
22	6. 沖縄	J11	2	—	ナギ	ナギ	〔三〕内堀重複	〔一〕内堀重複	馬場	石室、角門石、西
	7. 沖縄	J11	2	—	ナギ	ナギ	〔三〕内堀重複	〔一〕内堀重複	馬場	石室、角門石、西
	8. 沖縄	J11	2	—	ナギ	ナギ	〔三〕内堀重複	〔一〕内堀重複	馬場	石室、角門石、西
	9. 沖縄	J11	2	—	ナギ	ナギ	〔三〕内堀重複	〔一〕内堀重複	馬場	石室、角門石、西
	10. 沖縄	J11	2	—	ナギ	ナギ	〔三〕内堀重複	〔一〕内堀重複	馬場	石室、角門石、西
23	11. 沖縄	H1	2	—	ナギ	ナギ	〔三〕内堀重複	〔一〕内堀重複	馬場	石室、角門石、西
	12. 沖縄	H1	2	—	ナギ	ナギ	〔三〕内堀重複	〔一〕内堀重複	馬場	石室、角門石、西
	13. 沖縄	H1	2	—	ナギ	ナギ	〔三〕内堀重複	〔一〕内堀重複	馬場	石室、角門石、西
	14. 沖縄	H1	2	—	ナギ	ナギ	〔三〕内堀重複	〔一〕内堀重複	馬場	石室、角門石、西
	15. 沖縄	H1	2	—	ナギ	ナギ	〔三〕内堀重複	〔一〕内堀重複	馬場	石室、角門石、西
24	16. 沖縄	J22	2	—	ナギ	ナギ	〔三〕内堀重複	〔一〕内堀重複	馬場	石室、角門石、西
	17. 沖縄	J22	2	—	ナギ	ナギ	〔三〕内堀重複	〔一〕内堀重複	馬場	石室、角門石、西
	18. 沖縄	J22	2	—	ナギ	ナギ	〔三〕内堀重複	〔一〕内堀重複	馬場	石室、角門石、西
	19. 沖縄	J22	2	—	ナギ	ナギ	〔三〕内堀重複	〔一〕内堀重複	馬場	石室、角門石、西
	20. 沖縄	J22	2	—	ナギ	ナギ	〔三〕内堀重複	〔一〕内堀重複	馬場	石室、角門石、西
25	21. 沖縄	J22	2	—	ナギ	ナギ	〔三〕内堀重複	〔一〕内堀重複	馬場	石室、角門石、西
	22. 沖縄	J22	2	—	ナギ	ナギ	〔三〕内堀重複	〔一〕内堀重複	馬場	石室、角門石、西
	23. 沖縄	J22	2	—	ナギ	ナギ	〔三〕内堀重複	〔一〕内堀重複	馬場	石室、角門石、西
	24. 沖縄	J22	2	—	ナギ	ナギ	〔三〕内堀重複	〔一〕内堀重複	馬場	石室、角門石、西
	25. 沖縄	J22	2	—	ナギ	ナギ	〔三〕内堀重複	〔一〕内堀重複	馬場	石室、角門石、西

第4表 2層出土遺物鉢容表

番号	属種	生年 (J.G.)	出生地 (出島)	生年 地図	経度・緯度		高さ (m)	地型	傾向	地土	特徴
					経度	緯度					
27	アカウツギ	21	—	—	ナツ	ナツ	100	原野地	直向	石川・富山・福井の原野で、八代海	
	アカウツギ	21	—	—	ナツ	ナツ	100	原野地	直向	石川・富山・福井の原野で、八代海	
	アカウツギ	22	—	—	ナツ	ナツ	100	原野地	直向	石川・富山・福井の原野で、八代海	
	アカウツギ	22	—	—	ナツ	ナツ	100	原野地	直向	石川・富山・福井の原野で、八代海	
	アカウツギ	23	—	—	ナツ	ナツ	100	原野地	直向	石川・富山・福井の原野で、八代海	
	アカウツギ	23	—	—	ナツ	ナツ	100	原野地	直向	石川・富山・福井の原野で、八代海	
28	アカウツギ	21	—	—	ナツ	ナツ	100	原野地	直向	石川・富山・福井の原野で、八代海	
	アカウツギ	21	—	—	ナツ	ナツ	100	原野地	直向	石川・富山・福井の原野で、八代海	
	アカウツギ	22	—	—	ナツ	ナツ	100	原野地	直向	石川・富山・福井の原野で、八代海	
29	アカウツギ	22	—	—	ナツ	ナツ	100	原野地	直向	石川・富山・福井の原野で、八代海	
	アカウツギ	23	—	—	ナツ	ナツ	100	原野地	直向	石川・富山・福井の原野で、八代海	
	アカウツギ	23	—	—	ナツ	ナツ	100	原野地	直向	石川・富山・福井の原野で、八代海	

第五章 3層出土遺物鉢窓車

回	番号	品種	グリニッジ	開花期	出芽	花色	花形	葉形	根成	耐寒	耐土	備考
30	41	新豊	120	2	500	白	筒状	線形	根成	好寒	好肥	無
	42	新豊	120	2	500	白	筒状	線形	根成	好寒	好肥	無
	43	新豊	120	2	500	白	筒状	線形	根成	好寒	好肥	無
	44	新豊	120	2	500	白	筒状	線形	根成	好寒	好肥	無

第6表 S.Y.3(西侧土坑)出土遗物细密表

回	番号	器種	出土 グリッド	出土 位置	出土 遺物	調査・文書		性質		地城	出土	備考
						内面	内面	内面	内面			
31	45	圓筒	—	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—、—	
	46	圓筒	—	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—、—	高見野村
	47	圓筒	—	—	—	ナラ	ナラ	にない漆皮剥離	にない漆皮剥離	丸山	丸山、—、—	
	48	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、—、—		
	49	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、—、—		
	50	圓筒	—	—	ナラ	—	漆皮剥離	—	丸山	丸山、大門付、—		
32	51	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
	52	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
	53	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	にない漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
	54	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
	55	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
	56	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		

第7表 表土出土遺物観察表

回	番号	器種	出土 グリッド	出土 位置	出土 遺物	調査・文書		性質		地城	出土	備考
						石材	長さ	幅	厚さ			
33	56	石盤	—	—	黒雲母片岩	—	2.2	3.1	0.5	丸山	丸山	
	57	石盤	123	—	—	—	—	—	—	丸山	丸山	
	58	石盤(表面)	—	—	安山岩	—	0.3	0.4	2.0	丸山	丸山	
	59	石盤	—	—	安山岩	—	16.4	8.9	2.0	丸山	丸山、角田山、—	
	60	石板	—	—	安山岩	—	3.2	8.1	1.2	丸山	丸山、角田山、—	

第8表 搅乱出土遺物観察表

回	番号	器種	出土 グリッド	出土 位置	出土 遺物	調査・文書		性質		地城	出土	備考
						石材	長さ	幅	厚さ			
34	61	圓筒	—	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—	
	62	圓筒	—	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—	
	63	圓筒	—	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—	
	64	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
	65	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
	66	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
35	67	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
	68	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
	69	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
	70	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
	71	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
	72	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
36	73	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
	74	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
	75	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
	76	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
	77	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
	78	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
37	79	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
	80	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
	81	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
	82	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
	83	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
	84	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
38	85	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
	86	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
	87	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
	88	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
	89	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		
	90	圓筒	—	—	ナラ	ナラ	漆皮剥離	漆皮剥離	丸山	丸山、大門付、—		

第V章　まとめ

第1節　遺構について

今回の調査において検出された主な遺構はピット13基（可能性があるものも含む）、落とし穴と考えられる土坑1基（SK1）であった。中でもSK1は、上面は削平されており、本来の掘り込み面は不明ながら、底部に9基のピット状の掘り込みを有していた。断面において逆茂木痕の確認はできなかったが、底部ピットの配列から考えてこのピットに逆茂木を立てていた可能性も否定できない。また、埋土中から押型文土器が出土していることから、縄文時代早期の遺構であると考えらえる。

長貫A遺跡からやや東に位置する下油堀遺跡における2017年の調査においても、落とし穴と考えられる遺構が確認されており、長貫地区から油堀地区一帯が縄文時代においては、狩猟採集の場であったことをうかがわせる遺構といえよう。

第2節　遺物について

今回の調査では、コンテナ約10箱分の遺物が出土した。その多くは、耕作や畑地造営に伴う搅乱部からのものであるが、包含層である2層と3層からは押型文土器を中心に遺物が出土した。

押型文土器についていえば、下油堀遺跡で多く確認された楕円文のみならず、山形文を有する土器も39点確認された。（楕円文を有するものは183点）これら押型文土器は、口縁部の形状および施文の状態から田村式段階、大坪氏の長崎編年によれば百花台Ⅲ式段階のものにあたると考えられる。特に、3層において出土した35・36・37は、外面の山形文、口唇部の条痕文及び楕円文と施文のバリエーションに富むものであり、他の押型文土器と比べて異彩を放っている。

また、全体的な印象として山形文、楕円文ともに密な施文を有する土器が目立つ。下油堀遺跡で出土した押型文土器の楕円文が粗大化していることと対照的であるといえよう。

第3節　組織痕土器について

今回調査においては、4点に組織痕と考えられる文様を有する土器が確認された。3と4は、弘法原遺跡においても確認されている他、長貫遺跡においても1985年調査時に出土しているものと同種の原体によるものと考えられる。

また、54には、布目状の組織痕が確認されたほか、54・55においても組織痕が確認された。

島原市内の遺跡においてはこれまでも組織痕を有する土器が確認されているが、今回のようにまとまった数が確認されたのは初めてのことと言える。今回の調査は300m²という調査面積ながら、多種多様な組織痕土器を確認できたことは、今後この地域における組織原体の研究に大いに資するものであると考える。また、74にみられるような複雑な文様

を有する資料も確認されたことから、今後の調査・研究に期待したい。

第4節 包含層について

島原市でこれまで実施してきた発掘調査（確認調査を含む）においては、褐色を呈する長貫2層が主たる包含層として認識しており、黒褐色を呈する3層については無遺物層として調査を行ってきた。今回の調査においても3層は無遺物層と認識して調査を行ったが、調査中に3層の深部より原位置を保っていると考えらえる押型文土器が確認されたため、3層も遺物包含層として調査を行った。

近隣の遺跡に目を転じれば、百花台遺跡における3層が、土色や堆積状況が長貫3層と類似しており、旧石器から縄文早期の層位と位置付けられている。百花台3層と長貫3層が対応すると考えるならば、長貫3層も旧石器を含む遺物包含層であると想定される。

今後、近隣遺跡を調査する際には長貫3層に相当する層位において、遺物包含層である可能性を視野に入れた発掘調査が求められよう。

第5節 さいごに

今回の調査は1カ月という短期間ではあったが、前半は酷暑、後半は雨天という中での調査であった。調査区の大部分は耕作などにより削平されていたが、落とし穴遺構が検出され、出土遺物の中には組織痕土器を含む縄文時代早期の遺物が確認された。また、従来の発掘調査における認識を改めさせうる長貫3層からの遺物出土は、今後の発掘調査の計画・実施に資する成果であったといえるだろう。

最後になるが、酷暑の中あるいは雨に打たれながらも調査に従事された現場作業員の方々、丁寧に作業をしてくださった整理作業員の方々に心より感謝申し上げる。

〔引用文献・主要参考文献〕

長崎県吾妻町教育委員会1983『弘法原遺跡』長崎県吾妻町教育委員会

長崎県教育委員会1985『百花台遺跡』長崎県教育委員会

島原市教育委員会・長貫遺跡調査団1986『長貫遺跡緊急発掘調査概報』島原市教育委員会

長崎県吾妻町教育委員会1992『弘法原遺跡』長崎県吾妻町教育委員会

長崎県教育委員会1997『原始・古代の長崎県 資料編Ⅱ』長崎県教育委員会

南九州縄文研究会1998『九州の押型文土器論 改編』九州縄文研究会

長崎県教育委員会2006『肥賀太郎遺跡』長崎県教育委員会

大坪芳典2009「環境に影響を受けた九州の押型文土器—円筒形押型文土器・壺型土器について—」『南の縄文・地域文化論考』上

大坪芳典2012『島原半島における押型文土器研究の再考』『九州縄文時代早期研究ノート』5

大坪芳典2016『西北九州における貝殻円筒形時と押型文土器の編年』『西海考古』9

島原市教育委員会2017『上油堀遺跡・下油堀遺跡』島原市教育委員会

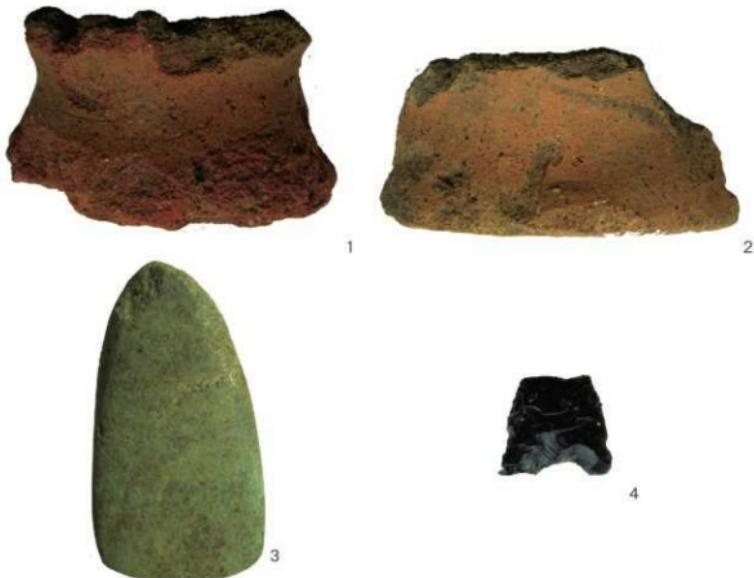
写 真 図 版



範囲確認調査 TP 48 土層堆積状況(北より)



範囲確認調査 TP 48 土層堆積状況(東より)



範囲確認調査 T P 48出土遺物



長貫 A 遺跡から眉山・普賢岳を望む

写真図版 3



長貴A遺跡から有明海を望む



調査区全景（図上は北西）



南壁(西から)



南壁(東から)



西壁(南東から)



中央壁(北西から)



2層遺物出土状況



3層遺物出土状況



調査区東側ピット群検出状況(西から)



調査区東側ピット群完掘状況



SP 1 半截状況(北から)



SP 1 完掘状況(北から)



SP 2 半截状況(北から)



SP 2 完掘状況(北から)



SP 3 半截状況(北から)



SP 3 完掘状況(北から)



SP 4 半截状況(西から)



SP 4 完掘状況(西から)



S P 5 半截状況(南から)



S P 5 完掘状況(南から)



S P 6 半截状況(北から)



S P 6 石器出土状況(北から)



S P 6 完掘状況(北から)



S P 7 半截状況(北から)



S P 7 完掘状況(北から)



S P 8 半截状況(北から)

写真図版 7



SP 8 完掘状況(北から)



SP 9 検出状況(北から)



SP 9 半截状況(北から)



SP 9 完掘状況(北から)



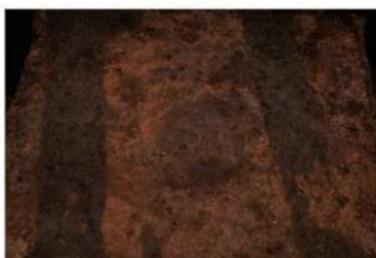
SP 10 検出状況(北から)



SP 10 半截状況(北から)



SP 10 完掘状況(北から)



SP 11 検出状況(北から)



SP 11 半截状況(北から)



SP 11 完掘状況(北から)



SP 12 検出状況(北から)



SP 12 半截状況(北から)



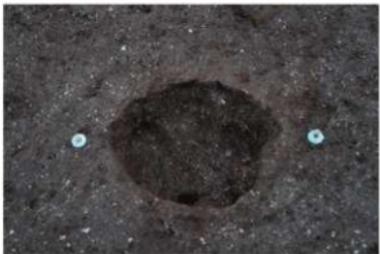
SP 12 完掘状況(北から)



SP 13 検出状況(北から)



SP 13 半截状況(北から)



SP 13 完掘状況(北から)

写真図版 9



S X 4 検出状況(東から)



S X 4 半截状況(西から)



S X 4 完掘状況(西から)



SK 1 検出状況(北から)



SK 1 半截状況(北から)



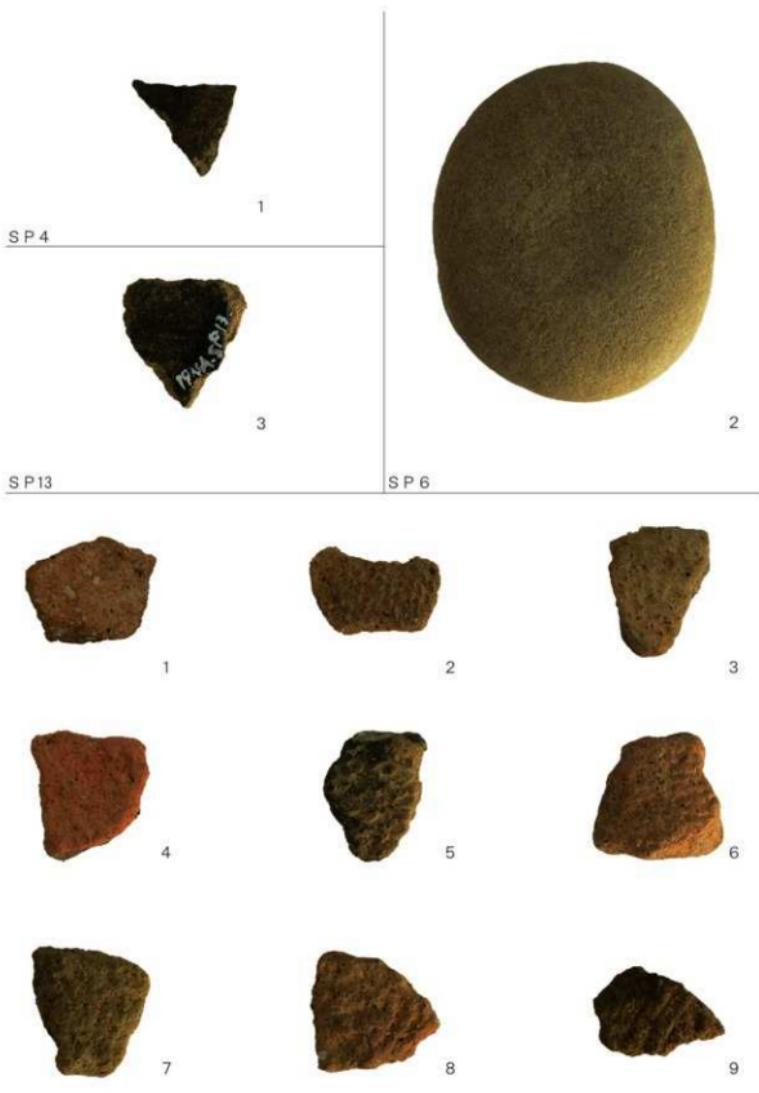
SK 1 完掘状況(北から)



調査区完掘状況

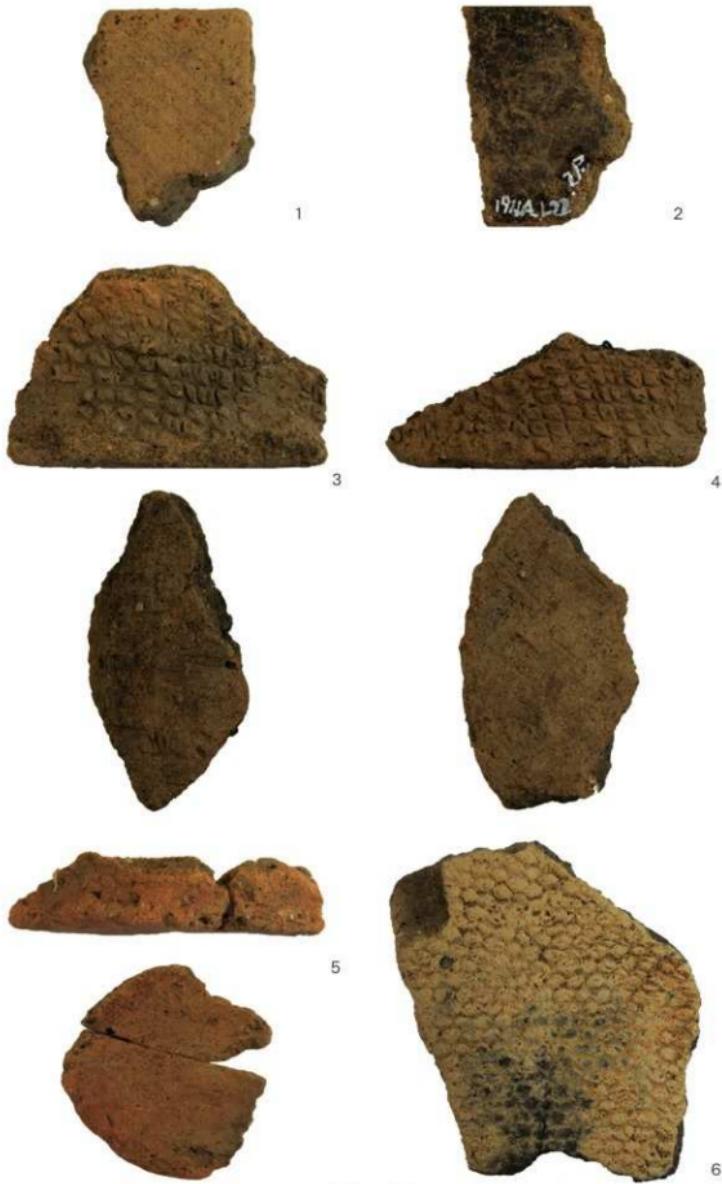


作業風景

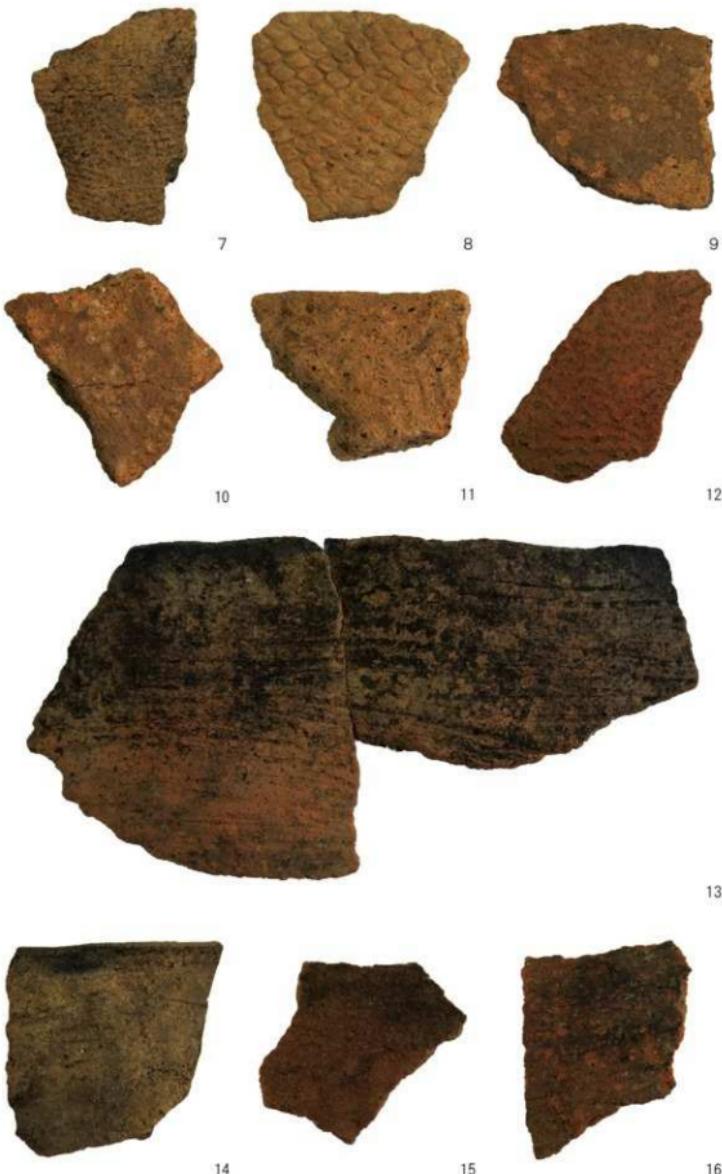


S X 1

SP 4 · SP 6 · SX 1 出土遺物



2層出土遺物



2層出土遺物



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26

2層出土遺物



27



28



29



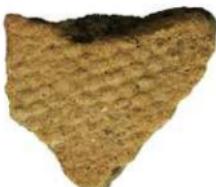
30



31



32



33



34

3層出土遺物



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44

S X 3 (倒木痕) 出土遺物



45



46



47



48



49



50

表土出土遺物



51



52



53



54



55



56



57



58



59



60

表土出土遺物



搅乱出土遺物



71



72



73



74



75



76



77



78

搅乱出土遺物



79



80



81



82



83



84



85



86



87



88

搅乱出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ながぬきえーいせき							
書名	長貫A遺跡							
副書名	水利施設等保全高度化事業 特別型(畠地帯担い手育成型)三会原第4地区に伴う埋蔵文化財発掘調査							
巻次								
シリーズ名	島原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第19集							
編著者名	吉岡慈文							
編集機関	島原市教育委員会							
所在地	〒859-1492 長崎県島原市有明町大三東戊1327番地 TEL 0957-68-5473							
発行年月	西暦2020年3月							
ふりがな 収藏遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながぬきえーいせき 長貫A遺跡	ながぬきえんしまばらし 長崎県島原市 ながぬきえよう 長貫町	203 - 009	092 - 50	32° 81' 37"	130° 32' 82"	20190801 ~ 20190831	300m ² (調査対象 面積)	水利施設等保 全高度化事業 特別型(畠地 帯担い手育成 型)三会原第4 地区
収藏遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
ながぬきえー 長貫A遺跡	遺物 包含 地	縄文時代	ピット 落と穴状遺構		縄文早期～ 縄文晩期土 器			

鳥原市文化財調査報告書 第19集

長貫A遺跡

水利整備等併存変遷事業 砂防帯(道路等押い手造成) 三会取引地区はむら町文化財保護委員会

発行日　　令和2年(2020)年3月

編集・発行　鳥原市教育委員会
◎元化有明町大字東成1337
TEL 0957(65)5473

監修　　三会印刷
長崎県島原市兔の川町乙 1657 番地1
TEL 0957(65)4155

